

— 農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I —

農業開発総合センター遺跡群 I (第1分冊)

KUBOMINOU

窪見ノ上遺跡

TATEISIGAHARA

建石ヶ原遺跡

KUSATO

古里遺跡

NISHIHARA

西原遺跡

第2分冊

FUKIAGEKONAKABARU  
吹上小中原遺跡

UMAMEGURI  
馬廻遺跡

SANTANMUTA  
三反牟田遺跡

第3分冊

図版編

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



調査前風景（東上空から）



建石ヶ原遺跡空中写真

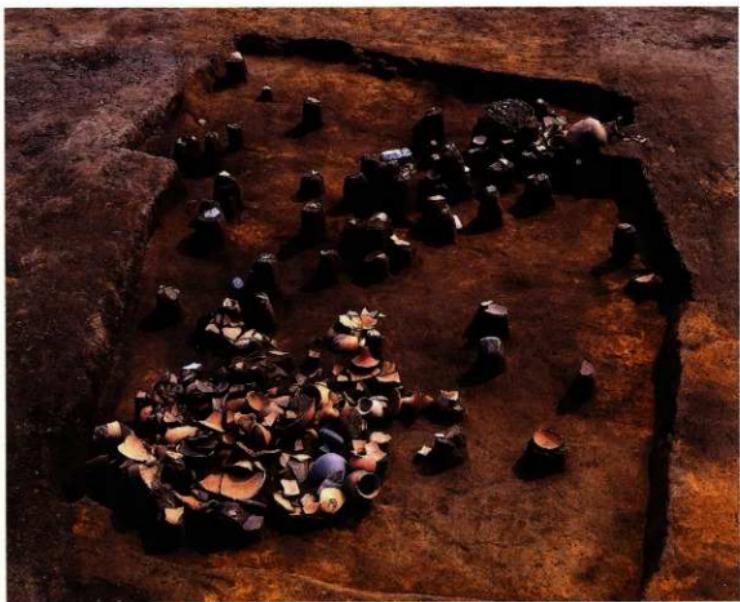
カラー図版2



古里遺跡空中写真



吹上小中原遺跡空中写真



吹上小中原遺跡4号住居跡土器出土状況



窪見ノ上遺跡出土縄文時代早期土器一括



吹上小中原遺跡土器溜り出土土器一括



吹上小中原遺跡 4号住居跡内出土土器一括

# 目 次

## 卷頭カラー

- 1 調査前風景（東上京から）
- 2 建石ヶ原遺跡空中写真
- 3 古里遺跡空中写真
- 4 吹上小中原遺跡空中写真
- 5 吹上小中原遺跡 4号住居跡土器出土状況
- 6 雄見ノ上遺跡出土縄文時代早期土器一括
- 7 吹上小中原遺跡土器一括
- 8 吹上小中原遺跡 4号住居跡内出土土器一括

## 第1分冊

- 第Ⅰ章 調査の経過  
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境  
第Ⅲ章 層位  
第Ⅳ章 雄見ノ上遺跡  
第Ⅴ章 建石ヶ原遺跡  
第VI章 古里遺跡・西原遺跡

## 第2分冊

- 第Ⅶ章 吹上小中原遺跡  
第Ⅷ章 馬追遺跡  
第Ⅸ章 三反牟田遺跡

## 第3分冊

岡版編

## 第1分冊目次

序文	
報告書抄録	
例言	
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7
第1節 遺跡の位置	7
第2節 周辺遺跡	8
1 吹上町	8
2 金峰町	8
第Ⅲ章 層位	11
第Ⅳ章 雄見ノ上遺跡	12
第1節 調査概要	12
1 遺跡の立地及び調査概要	12
2 遺跡の層序	14
第2節 発掘調査の成果	16
1 旧石器時代の調査	16
2 縄文時代早期の調査	16
(1) 遺構	16
(2) 遺物	16
3 縄文時代前・中・後期の調査	112
(1) 遺構	112
(2) 遺物	112
4 中・近世の調査	115
(1) 遺構	115
(2) 遺物	115
第3節 小結	116
第Ⅴ章 建石ヶ原遺跡	120
第1節 調査概要	120
1 遺跡の立地及び調査概要	120
2 遺跡の層序	120
第2節 発掘調査の成果	123
1 旧石器時代（Ⅳ～Ⅵ層）の調査	123

(1) 遺構	123
(2) 遺物	124
2 繩文時代早期（V～IV層）の調査	128
(1) 遺構	128
(2) 遺物	131
3 純文時代前期～晚期（III～II層）の調査	143
(1) 遺構	143
(2) III～II層の遺物	143
4 弥生時代～古代（III～表層）の調査	160
(1) 遺構	160
(2) 弥生時代の遺物	160
(3) 古墳時代の遺物	161
(4) 古代の遺物	161
5 中世（II層～表層）の調査	163
(1) 遺構	163
(2) 遺物	169
第3節 小結	169
付編 科学分析結果報告	175
第VI章 古里・西原遺跡	181
第1節 古里遺跡	181
1 遺跡の立地及び調査概要	181
2 遺跡の層序	181
3 発掘調査の成果	185
(1) 繩文時代の調査	185
① 調査の概要	185
② 遺物	185
(2) 古墳時代の調査	191
遺物	191
(3) 中世の調査	192
① 調査の概要	192
② 遺構	192
③ 遺物	205
第2節 西原遺跡	210
1 遺跡の立地	210
2 調査の概要	210
第3節 小結	210

## 挿図目次

第1図 農業開発総合センター内遺跡群図	7
第2図 周辺遺跡図（吹上町・金峰町）	10
第3図 模式柱状図	11
窪見ノ上遺跡	
第1図 窪見ノ上遺跡位置図（1/25,000）	12
第2図 周辺地形図及びグリッド図	13
第3図 土層断面図1	14
第4図 土層断面図2	15
第5図 V層遺構配置図	17
第6図 墓石遺構1	18
第7図 墓石遺構2	19
第8図 墓石遺構3	20
第9図 墓石遺構4	21
第10図 集積遺構内出土遺物1	22
第11図 集積遺構内出土遺物2	23
第12図 V層遺物出土状況	24
第13図 I類上器・II類土器分布状況	25
第14図 I類土器1	27
第15図 I類土器2	28
第16図 I類上器3	29
第17図 I類土器4	30
第18図 I類土器5	31
第19図 I類上器6	32
第20図 I類土器7	33
第21図 I類上器8	34
第22図 I類上器9	35
第23図 I類土器10	36
第24図 I類土器11	37
第25図 I類上器12	38
第26図 I類上器13	39
第27図 I類土器14	40
第28図 I類土器15	41
第29図 I類上器16	42
第30図 I類土器17	43
第31図 I類土器18	44
第32図 I類上器19	45
第33図 I類土器20	46
第34図 II類土器1	50
第35図 II類上器2	52
第36図 III類土器1	53
第37図 III類土器2	54
第38図 III類上器3	55

第39図	III類上器4	56	第84図	縄文時代早期出土石器29	108
第40図	III類土器5	57	第85図	縄文時代早期出土石器30	109
第41図	III類土器6	58	第86図	IV類土器	111
第42図	III類上器7	59	第87図	X類・XI類土器	112
第43図	IV類土器1	61	第88図	II・III層出土石器	113
第44図	IV類土器2	62	第89図	III層出土石器	114
第45図	V類土器1	63	第90図	古道遺構	115
第46図	V類土器2	64	第91図	中世・近世遺構配置図	115
第47図	V類土器3	65			
第48図	V類土器4	66			
第49図	VI類上器	68			
第50図	VI類土器1	70	第1図	建石ヶ原遺跡位置図(1/25,000)	120
第51図	VII類土器2	71	第2図	周辺地形図及びグリッド図	121
第52図	VII類上器3	72	第3図	遺跡上層断面図	122
第53図	VIII・IX類土器	73	第4図	土坑	123
第54図	縄文時代早期出土石器1	75	第5図	VII層遺構配置図	123
第55図	縄文時代早期出土石器2	76	第6図	VII層遺物出土状況	125
第56図	縄文時代早期出土石器3	77	第7図	旧石器実測図1	126
第57図	石器の分類図	78	第8図	旧石器実測図2	127
第58図	石器分析・分布図	79	第9図	縄文早期土坑	128
第59図	縄文時代早期出土石器4	80	第10図	縄文時代早期遺構配置図	128
第60図	縄文時代早期出土石器5	81	第11図	縄文時代遺物出土状況	129
第61図	縄文時代早期出土石器6	82	第12図	I類土器	132
第62図	縄文時代早期出土石器7	83	第13図	II類土器	133
第63図	縄文時代早期出土石器8	85	第14図	III類上器1	134
第64図	縄文時代早期出土石器9	87	第15図	III類土器2・IV類土器	135
第65図	縄文時代早期出土石器10	88	第16図	V類土器	136
第66図	縄文時代早期出土石器11	89	第17図	VI類上器	137
第67図	縄文時代早期出土石器12	90	第18図	VI類土器	138
第68図	縄文時代早期出土石器13	91	第19図	縄文時代早期出土石器1	140
第69図	縄文時代早期出土石器14	92	第20図	縄文時代早期出土石器2	141
第70図	縄文時代早期出土石器15	94	第21図	縄文晚期遺構(溝状遺構)	144
第71図	縄文時代早期出土石器16	95	第22図	VII類土器1	146
第72図	縄文時代早期出土石器17	96	第23図	VII類上器2	147
第73図	縄文時代早期出土石器18	97	第24図	IX類土器	148
第74図	縄文時代早期出土石器19	98	第25図	X類土器	149
第75図	縄文時代早期出土石器20	99	第26図	XI類上器	150
第76図	縄文時代早期出土石器21	100	第27図	XII・XIII類土器	151
第77図	縄文時代早期出土石器22	101	第28図	XIV類土器	152
第78図	縄文時代早期出土石器23	102	第29図	XV類上器	153
第79図	縄文時代早期出土石器24	103	第30図	縄文前期～晚期出土石器1	156
第80図	縄文時代早期出土石器25	104	第31図	縄文前期～晚期出土石器2	157
第81図	縄文時代早期出土石器26	105	第32図	縄文前期～晚期出土石器3	158
第82図	縄文時代早期出土石器27	106	第33図	縄文前期～晚期出土石器4	159
第83図	縄文時代早期出土石器28	107	第34図	占領時代遺構配置図	160
			第35図	古墳時代住居	161

第36図	弥生～古墳時代土器及び古代の須恵器	162
第37図	弥生時代石器	162
第38図	中世溝状遺構1	164
第39図	中世溝状遺構2	165
第40図	中世溝状遺構3	166
第41図	中世溝状遺構4	167
第42図	中世溝状遺構5～9	168
第43図	中世溝状遺構10	169
第44図	中世溝状遺構11	170
第45図	中世溝状遺構12	171
第46図	中世方形周溝（墓）及び遺構内出土遺物	172
第47図	集石遺構	173
第48図	中世集石遺構配置図	173
第49図	中世白磁・青磁	174
付図1	縄文晚期遺構及び遺物出土状況	
付図2	中世遺構配置図	

## 古里・西原遺跡

第1図	古里・西原遺跡位置図（1/25,000）	181
第2図	周辺地形図及びグリッド図	182
第3図	土層断面図	183
第4図	古里遺跡全遺物出土状況図	184
第5図	縄文時代遺物出土状況（掲載分）	186
第6図	縄文時代早期・前期出土土器	187
第7図	縄文時代晚期出土土器	188
第8図	縄文時代出土石器1（石鏃・石核）	189
第9図	縄文時代出土石器2（砥石・打製石斧）	189
第10図	古墳時代出土土器	191
第11図	古墳時代遺物出土状況（掲載分）	191
第12図	中世遺構配置図	193
第13図	中世遺物出土状況（掲載分）	194
第14図	1号掘立柱建物跡	195
第15図	3号掘立柱建物跡	196
第16図	4号掘立柱建物跡	197
第17図	5号掘立柱建物跡	198
第18図	6号掘立柱建物跡	199
第19図	9号掘立柱建物跡	200
第20図	10号掘立柱建物跡	201
第21図	12号掘立柱建物跡	202
第22図	溝状遺構及び断面図	204
第23図	中世出土遺物1	206
第24図	中世出土遺物2	207
第25図	中世出土遺物3	208
第26図	中世出土遺物4	209

第2分冊 小中原遺跡・馬廻遺跡・三反半田遺跡

## 第3分冊 図版

## 第2分冊目次

第VII章	吹上小中原遺跡	1
第1節	調査概要	1
1	遺跡の立地及び調査概要	1
2	遺跡の層序	1
第2節	発掘調査の成果	6
1	旧石器時代の調査	6
(1)	遺構	6
(2)	遺物	6
2	縄文時代草創期の調査	8
3	縄文時代早期の調査	14
4	縄文時代後期の調査	40
5	縄文時代後期の調査	52
6	縄文時代晩期の調査	55
7	弥生時代の調査	77
(1)	遺構	77
(2)	遺物	77
8	古墳時代の調査	82
(1)	遺構	82
(2)	遺物	123
9	古代の調査	138
(1)	遺構	138
(2)	遺物	138
10	中世の調査	139
(1)	遺構	139
第3節	小結	150
第VIII章	馬廻遺跡	152
第1節	調査概要	152
1	遺跡の立地及び調査概要	152
第2節	発掘調査の成果	152
第3節	小結	153
第IX章	三反半田遺跡	159
第1節	調査概要	159
1	遺跡の立地及び調査概要	159
第2節	発掘調査の成果	159
第3節	小結	159

\* 2分冊挿図日次及び3分冊の図版目次は、各分冊に記載。

## 序 文

鹿児島県は、「鹿児島県総合基本計画」に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島の形成」の一環として鹿児島県農業開発総合センターを建設することとしました。鹿児島県立埋蔵文化財センターは、建設事業に先立って、平成8年から8年間にわたって埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

この報告書は農業開発総合センター建設予定地内に存在する24遺跡の内、吹上町に所在する7遺跡の発掘調査の記録です。

この調査によって、旧石器時代から中世までの各時代の遺構・遺物が発見されています。窪見ノ上遺跡では、縄文時代早期前葉の良好な資料と石斧製作の痕跡ではないかと思われる資料が出土しています。吹上小中原遺跡では、縄文時代早期の石槍が3本まとめて出土する石斧埋納遺構や、古墳時代の集落跡から畿内系初期須恵器が出土するなど貴重な情報が得られています。また、建石ヶ原遺跡では、縄文時代晩期の道の跡と思われる遺構や中世の方形周溝墓が発見され、古里遺跡では、中世の集落（掘立柱建物跡12棟）と溝状遺構が発見されています。

この調査の成果が地域の歴史研究や埋蔵文化財の啓発普及の一助になれば幸いです。

最後に、調査に御協力をいただいた県農政部農業開発総合センター整備事務局をはじめ、金峰町・吹上町の関係部局、そして発掘調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 木原俊孝

# 報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月日	のうぎょうかいはつそごうせんたいいせきぐん くほみのうえいせきほか 農業開発総合センター遺跡群Ⅰ(深見ノ上遺跡) 農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 鹿児島県立埋蔵文化財センター 83 中村耕治・若岸弘・廣木深次・松下健生・川元慎久 鹿児島県立埋蔵文化財センター 〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175-1 0995-48-5811 2005年3月30日							
所取遺跡名 所取遺跡名	所取遺跡名 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	測量面積 m <sup>2</sup>	調査起因	
深見ノ上 延石ヶ原 古里 西原 吹上小中原 馬廻 三反半田	鹿児島県 吹上町	46367	34°84'00" 34°120' 34°119' 34°104'0 34°105'0 34°107'0 34°106'0	31°29'13" 31°28'43" 31°28'43" 31°28'43" 31°29'03" 31°29'01" 31°29'09"	130°20'30" 130°21'06" 130°21'03" 130°21'00" 130°21'09" 130°20'34" 130°20'41"	2003.5~2003.9 1999~2000 1999~2000 2000 2000~2001 2001 1999	35,490 19,000 15,160 28,000 31,930 31,960	農業開発総合センター建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
深見ノ上	旧石器時代 縄文時代 (早期)	集石・集積7基	剥片					
延石ヶ原	(前期) (中期) (後期) 旧石器時代 縄文時代 (早削期) (早明) (後明) 古墳 中世	上坑・ブロック5基	石錐・石槍・石斧・スクレイバー・磨石・石器・岩本式土器・前平式土器・石坂式土器・下洞半式土器・桑ノ丸式土器・中原式土器・柳型文土器 曾畠式土器 臺口式土器 指宿式土器 マイクロブレイド・三稜尖頭器					
古里	縄文時代 (晩明) 中世	溝状遺構 甕穴住居跡1基 方形周溝墓 變化面・清	上器・石錐 前平式土器・石坂式土器・桑ノ丸類上器 指宿式土器 人化式土器 金貝					
西原	縄文時代	掘立柱遺物跡12棟 溝状遺構	土師器・須恵器・陶磁器・滑石製石錐					
吹上小中原	旧石器時代 縄文時代 (草削明) (早明) (後明) 弥生時代 古墳時代 古代 中世 縄文時代 (早期)	落し穴 集石・石錐製作跡 石槍埋納遺構・集石 甕穴住居跡7基・上坑 ・上層溢り 掘立柱遺物跡9棟 石器製作跡?	細石刃・細石核・剥片 上器・石錐・印引き 前平式土器・青田式土器・石坂式土器 桑ノ丸類土器 人化式土器・石斧・石錐 高橋式土器・山之内式土器・松木道式土器 初期須恵器・成田式土器・鐵斧・鐵石 土師器・須恵器 陶磁器					
馬廻	縄文時代 (後期)		石坂式土器・桑ノ丸式土器					
三反半田			石錐					



農業開発センター遺跡群位置図 (1/5,000)

## 例　　言

- 1 本報告書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成8年度・9年度に確認調査、平成10年度から平成15年度までの間、鹿児島県農政部農業開発総合センター整備事務局の依頼を受けて、鹿児島県教育委員会鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査主体となって実施した。
- 3 報告書作成事業は、平成15年度は発掘調査と併行して実施し、平成16年度は整理作業だけを実施した。
- 4 農業開発総合センター建設に伴う発掘調査対象遺跡は、吹上町・金峰町に24遺跡が存在しているが、本年度は、吹上町に所在する7遺跡について報告することとした。
- 5 挿図番号・表番号・遺物番号については、各遺跡毎の通し番号とした。また、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図毎に示している。
- 7 報告書中のレベル数値はすべて海拔絶対高である。
- 8 遺跡における遺構等の実測は発掘担当者が行なったが、一部は実測委託も行なった。
- 9 遺物復元・実測・製図等の整理作業は鹿児島県立埋蔵文化財センター整理作業員が携わった。また、一部の石器の実測・製図については、実測委託をした。
- 10 本報告書の編集は、中村耕治・岩屋高広・廣栄次・松下建生・川元頼久が行い、遺物・遺構の実測・製図は遺跡を分担してそれぞれで実施した。執筆分担は以下のとおりである。また、写真撮影については横手浩二郎・西園勝彦の協力を得た。

第Ⅰ章 発掘調査の経過 中村 耕治

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 中村 耕治

第Ⅲ章 層位 中村 耕治

第Ⅳ章 窪見ノ上遺跡 岩屋 高広・廣 栄次

第Ⅴ章 建石ヶ原遺跡 川元 頼久

第Ⅵ章 古里遺跡・西原遺跡 松下 建生

第Ⅶ章 吹上小中原遺跡 中村 耕治

第Ⅷ章—3節—5（中世） 松下 建生

第Ⅸ章 小中原遺跡の石器 立神 次郎

第Ⅹ章 馬廻遺跡 中村 耕治

第Ⅺ章 三反牛田遺跡 中村 耕治

- 11 吹上小中原遺跡は金峰町所在の小中原遺跡と区別するために所在地の吹上町の吹上を付して遺跡名とした。ただし本文中では小中原遺跡として記述した部分が多くある。
- 12 遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用する計画である。

## 第Ⅰ章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

県農政部農業開発総合センター整備事務局（以下農開総センター整備事務局）は、「鹿児島県総合基本計画」（平成6年）に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島の形成」の一環として、鹿児島県農業開発総合センター建設事業を日置郡吹上町・金峰町地区（吹上町大字入米・中之里・湯之浦・和田及び金峰町大字大野・代表地番日置郡金峰町大野灘前2935-1番地）内において計画した。このため農開総センター整備事務局は、本事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について県教育庁文化課（平成8年から文化財課以下文化財課）に照会を行なった。これを受けた文化財課は平成6年11月に分布調査を実施した。その結果、事業区域内の対象面積1,347,900m<sup>2</sup>に10遺跡が存在することが判明した。

分布調査の結果を受けて、県農政部・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果、対象地内の追跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当することとした。

確認調査は、平成8年度・9年度に実施した。確認調査の結果、24遺跡（約10,000m<sup>2</sup>）が存在することが明らかになり、建築物予定地及び圃場整備により削除される部分等について記録保存のための本調査を実施することとなった。

### 第2節 調査の組織

平成8年度

事業主体 鹿児島県農業開発総合センター整備事務局

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 吉元 正幸

調査企画 ク 次長兼総務課長 尾崎 進

ク 主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝洋

ク 調査課長補佐 新東 晃一

ク 主任文化財主事兼第二調査係長 立神 次郎

調査担当 ク 文化財主事 豊岡 隆夫  
ク 文化財研究員 有馬 孝一  
ク 文化財研究員 橋口 醍醐  
事務担当 ク 主事 前原敷裕徳  
ク 主事 追立ひとみ

平成9年度

事業主体 鹿児島県農業開発総合センター整備事務局

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 吉元 正幸

調査企画 ク 次長兼総務課長 尾崎 進  
ク 主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝洋  
ク 調査課長補佐 新東 晃一  
ク 主任文化財主事兼第二調査係長 立神 次郎

調査担当 ク 文化財主事 東 和幸  
ク 文化財研究員 山崎 克之

事務担当 ク 主事 前原敷裕徳  
ク 主事 追立ひとみ

調査指導

H.9.12.5 鹿児島県考古学会長 河口 貞徳  
H.10.1.26 鹿児島短期大学大学長 三木 靖  
H.10.1.29 鹿児島大学法文学部教授 上村 俊雄  
H.10.2.17 鹿児島大学工学部教授 土田 充義

平成10年度

事業主体 鹿児島県農業開発総合センター整備事務局

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 吉元 正幸

調査企画 ク 次長兼総務課長 尾崎 進  
ク 主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝洋  
ク 調査課長補佐 新東 晃一

調査担当 ク 文化財主事 中村 耕治  
ク 文化財主事 藤崎 光洋  
ク 文化財主事 東 和幸

事務担当 ク 主事 前原敷裕徳  
ク 主事 政倉 孝弘

	主事 潟池 佳子	青崎 和憲
調査指導	鹿児島県考古学会長 河口 貞徳	主任文化財主事 中村 耕治
	鹿児島大学法文学部教授 上村 俊雄	主任文化財主事 中村 耕治
	鹿児島大学法文学部助教授 本川 道輝	文化財主事 西郷 吉郎
	鹿児島経済大学 中村 明哉	文化財主事 山崎 省一
	国立歴史民俗博物館助教授 股栗 博巳	文化財研究員 橋手浩二郎
	鹿児島県立博物館学芸主事 成尾 英仁	文化財調査員 西 古意子
平成11年度		事務担当
事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備	総務係長 有村 貢
事務局		主事 潟池 佳子
調査主体	鹿児島県教育委員会	調査指導
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	H.13.3.5 鹿児島大学法文学部教授 上村 俊雄
	所長 古永 和人	H.13.1.23 鹿児島大学法文学部助教授 本川 道輝
調査企画	次長兼統務課長 黒木 友幸	H.13.3.14~15 東海大学文学部教授 織笠 啓昭
	主任文化財主事兼調査課長	H.13.1.17 鹿児島女子短期大学講師 大西 智和
	戸崎 康洋	平成13年度
	調査課長補佐兼第一調査係長	事業主体 鹿児島県農業開発総合センター整備
	新東 晃一	事務局
調査担当	主任文化財主事 中村 耕治	調査主体 鹿児島県教育委員会
	文化財主事 寺師 孝則	調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
	文化財主事 藤崎 光洋	所長 井上 明文
	文化財研究員 山崎 省一	次長兼統務課長 黒木 友幸
	文化財研究員 横手浩二郎	主任文化財主事兼調査課長
事務担当	総務係長 有村 貢	新東 晃一
	主事 潟池 佳子	調査課長補佐 立神 次郎
調査指導		主任文化財主事兼第一調査係長
H.10.10.17	鹿児島大学工学部教授 土田 充義	青崎 和憲
H.10.11.17	鹿児島大学法文学部教授 上村 俊雄	主任文化財主事 中村 耕治
H.10.11.24	鹿児島大学法文学部助教授 本川 道輝	主任文化財主事 中村 耕治
H.12.11.8~9	ラ・サール学園教諭 永山 修一	文化財主事 寺師 孝則
	熊本県城南町教育委員会 清田 純一	文化財主事 湯之前 尚
平成12年度		文化財主事 西郷 吉郎
事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備	文化財主事 高見 憲次
事務局		文化財調査員 売山 葉子
調査主体	鹿児島県教育委員会	文化財調査員 森田 裕之
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財調査員 坂元 恒太
	所長 井上 明文	事務担当
調査企画	次長兼統務課長 黒木 友幸	総務係長 前田 昭信
	主任文化財主事兼調査課長	主事 池 珠美
	新東 晃一	調査指導
	調査課長補佐 立神 次郎	H.14.1.16 鹿児島大学名誉教授 五味 克夫
	主任文化財主事兼第一調査係長	H.13.10.11~12 福岡大学人文学部教授 小田富士大

H.14.1.17～18	大谷女子大学文学部教授	調査担当	文化財主事 湤之前 尚
	中村 浩		文化財主事 日高 正人
H.13.10.4	鹿児島大学法文学部助教授 木田 道輝		文化財主事 森 雄二
平成14年度			文化財主事 岩戸 季夫
事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備		文化財主事 廣 宗次
事務局			文化財研究員 長崎慎人郎
調査主体	鹿児島県教育委員会	整理担当	主任文化財主事 中村 耕治
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	事務担当	総務係長 平野 浩二
	所長 井上 明文		主事 池 珠美
調査企画	〃 次長兼総務課長 田中 文雄	調査指導	H.16.11.18 鹿児島大学法文学部助教授 木田 道輝
	〃 調査課長 新東 晃一		H.16.1.28 鹿児島大学助教授 中村 直子
	〃 調査課長補佐 立神 次郎		H.16.12.12～13 別府大学文学部教授 橋 昌信
	〃 主任文化財主事兼第一調査係長 池畠 耕一		平成16年度(整理作業)
	〃 主任文化財主事 中村 耕治	事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備
調査担当	〃 主任文化財主事 中村 耕治	事務局	
	〃 文化財主事 湯之前 尚	企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
	〃 文化財主事 西郷 吉郎	作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	〃 文化財主事 富山 孝一		所長 木原 俊孝
	〃 文化財主事 森 雄二	作成企画	〃 次長兼総務課長 賀雅 彰
	〃 文化財研究員 泰波田武志		〃 調査課長 新東 晃一
	〃 文化財調査員 坂本佳代子		〃 調査課長補佐 立神 次郎
事務担当	〃 総務係長 前田 昭信		〃 主任文化財主事兼第一調査係長
	〃 上事 池 珠美		池畠 耕一
調査指導			〃 主任文化財主事 中村 耕治
H.14.12.16～17	立命館大学文学部教授	作成担当	〃 調査課長補佐 立神 次郎
	矢野 健一		〃 主任文化財主事兼第一調査係長
H.14.11.7	鹿児島大学教育学部教授 森脇 広		池畠 耕一
H.14.8.8	鹿児島大学法文学部助教授 木田 道輝		〃 主任文化財主事 中村 耕治
H.12.12～13	熊本大学 助教授 小畑 弘己		〃 文化財主事 岩戸 季夫
平成15年度(整理作業)			〃 文化財主事 廣 宗次
事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備		〃 文化財主事 松下 建生
事務局			〃 文化財研究員 川元 祖久
調査主体	鹿児島県教育委員会	事務担当	〃 総務係長 平野 浩二
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		〃 主事 竹之内有里
	所長 木原 俊孝	報告書作成検討委員会	H.16.12.27 所長他9名
調査企画	〃 次長兼総務課長 田中 文雄	報告書作成指導委員会	H.16.12.21 調査課長他8名
	〃 調査課長 新東 晃一	企画担当	東 和幸・横手浩二郎
	〃 調査課長補佐 立神 次郎		
	〃 主任文化財主事兼第一調査係長 池畠 耕一	指導者・協力者	
	〃 主任文化財主事 中村 耕治		H.17.2.21 鹿児島大学法文学部助教授 木田 道輝
			H.17.2.13 鹿児島大学助教授 橋本 達也

### 第3節 調査の経過

平成6年の分布調査の結果に基づいて平成8年度から確認調査を始め平成9年度からは本調査も開始した。

平成8年度は、平成8年10月21日より平成9年3月24日までの約6か月間実施した。主に農業大学校建設予定地に係る西原遺跡・古里遺跡・建石ヶ原遺跡・諏訪前遺跡・諏訪半田遺跡と調整池造成工事に係る宗円源遺跡・頭無遺跡・頭無追田遺跡、耕種試験場の管理・研究棟建設予定地の馬塚松遺跡・諏訪半田遺跡・諏訪脇遺跡に関して31箇所のトレンチを設定して確認調査を行なった。その結果、旧石器時代・縄文時代草創期・早期・前期・晚期、古代の遺物や遺構が認められた。ただ、昭和30年代に大規模な圃場整備事業が行なわれ、上層部の遺物包含層が削除されている部分があることも確認された。

平成9年度は、平成9年6月23日より平成10年3月27日までの10ヶ月間実施した。平成8年度の確認調査の補充で買取の済んでいる畠地を対象に150箇所のトレンチ調査及び耕種試験場本館・研究棟建設予定地の馬塚松遺跡・農業大学校予定地の諏訪半田遺跡・耕種試験場畠地予定地の人門口遺跡について一部本調査を実施した。確認調査の結果、広範囲に遺跡が広がることが判明した。また、馬塚松遺跡では中世～近世の掘立柱建物跡や道の跡が検出され、諏訪半田遺跡では古代の溝状遺構・掘立柱建物跡が検出された。

平成10年度は、農業大学校の予定地を中心に平成10年4月24日から平成11年3月26日までの11か月間実施した。諏訪前遺跡は研修棟及び削平される圃場部分、建石ヶ原遺跡は学生寮及び削平される圃場部分、古里遺跡は講堂等関連施設の本調査である。

また、それまでに用地買取が完了であった尾ヶ原遺跡・三反半田遺跡・窪見ノ上遺跡について確認調査を実施した。諏訪前遺跡では、縄文時代早期の貝石遺構が検出され、縄文時代晚期の理設土器・柱列・掘立柱建物跡(1間×1間)・上坑等の遺構が検出され、おびただしい土器や石器に混ざって緑色の石で作られた玉類(丸玉・管玉・勾玉)も出土している。また、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居3基も検出されている。1号住居からは竪(ドラゴン)を描いた上器片も出土している。建石ヶ原遺跡では、旧石器時代・縄文時代草創期・早期・前期・後期・晚期、

弥生時代・古墳時代・中世等各時期の遺物が出土している。遺構としては、縄文晩期で道の跡ではないかと思われる浅い溝1条、古墳時代で竪穴住居1基、中世で方形周溝墓1基等が検出されている。確認調査を実施した尾ヶ原遺跡・窪見ノ上遺跡・三反半田遺跡についても遺物の出土が見られ遺跡の存在が確認された。

平成11年度は、農業大学校予定地及び削平部分の本調査を平成11年4月20日から平成12年3月24日までの11か月間実施した。諏訪前遺跡は研修棟の建設予定地である。10年度と同様縄文時代早期・晚期が中心であるが縄文時代中期・後期の遺物も見られた。諏訪前遺跡の調査については11年度で終了した。諏訪半田遺跡は研修棟・園池・幹線道路部分の調査である。縄文時代草創期・早期・晚期、弥生時代終末から古墳時代初期の磁器、古代、中世の各時期の遺構遺物が出土している。縄文時代草創期では羅群が検出され、早期では集石遺構6基も検出されている。晚期では、深鉢を埋めた埋設土器が3基、柱列11基が検出され、玉類も出土している。古墳時代の竪穴住居跡は2基検出され、諏訪前遺跡の住居と同時期と思われる。古代および中世では、溝状遺構・掘立柱建物跡が検出されている。遺物では「王」もしくは「玉」の字が書かれた青磁も出土している。建石ヶ原遺跡は幹線道路が国道270号線と交差する取付部の調査である。縄文時代早期・晚期の遺物が出土するが、ここでは、旧石器時代の遺物が主で、マイクロブレイド・チップ・フレイク・三稜尖頭器が出土している。古里遺跡は教育管理棟・食堂・体育館・武道館等の建設予定地の調査である。縄文時代晚期の遺物が出土しているが量は少ない。中世では、掘立柱建物跡12棟が検出され陶磁器も出土している。西原遺跡は幹線道路部分の確認調査である。トレンチ3か所を設定し2か所から縄文時代の遺物が出土したが遺物包含層に影響がないことと遺物が少ないと本調査は実施しなかった。小中原遺跡は農業大学校の果樹試験場のための調査である。一部縄文時代早期の遺物が出土したが、古墳時代・中世が主である。また、北側の台地先端部については削平されるため下層確認を実施したが、旧石器・縄文時代早期の遺物が確認された。古墳時代では竪穴住居跡3基と上坑2基が検出され、中世では掘立柱建物跡2棟、溝状遺構1条が検出された。頭無追田遺跡は1号調査池に伴い削平が予定されるための調査である。縄文時代早期の遺

物が多く、集石遺構 5 基も検出された。

平成12年度は農業大学校の果樹園・飼料畑と耕種試験場の畠地による削平部分、幹線道路（削平）部分を中心に平成12年4月24日から平成13年3月27日までの11ヶ月間実施した。吹上小中原遺跡は昨年の引き続きであるが、旧石器時代の遺物や落し穴、縄文時代草創期の集石遺構・石器製作跡、縄文早期の石棺埋納遺構など古い時代の調査が終了される。また、昨年に引き続き古墳時代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡が検出され、竪穴住居 7 基、掘立柱建物跡 9 棟が検出された。4号竪穴住居跡からは在地の成川式上器と共に初期須恵器が出土し、成川式土器の編年が指標となるものと思われる。大門口は耕種試験場の研究茶園部分で削平を受ける部分を調査し、下層については随時トレーナーを設けて確認した。縄文時代晚期が主であり、柱穴列24基、掘立柱建物跡（1間×1間）10棟、土坑 5 基が検出された。中世から現代までの遺構・遺物も見られるが、双魚文の描かれた中世の青磁、近世の溝状遺構、今も残っている諏訪神社の参道に向かっている昭和30年代までの道などが特筆される。また、年度末に縄文時代の块状耳垂りも出土している。

諏訪臨道跡は幹線道路部分の調査である。縄文時代早期から晩期までの遺構・遺物が出土している。宗円壇遺跡も幹線道路部分の調査である。縄文時代晩期の柱穴列 3 基と遺物が検出されている。また、一部に旧石器時代の包含層が確認され、調査の結果ナイフ形石器の石器製作跡の可能性が高いものである。馬塚遺跡は農業大学校の研究畠部分の調査である。調査予定地域は基盤の岩盤が露出するなど遺物包含層の残存する部分は少なかったが、縄文時代早期の良好な資料が得られた。市堀遺跡、頭無迫田遺跡は隣接する遺跡である。いずれも耕種試験場の研究畠部分である。縄文時代晩期の柱穴列・掘立柱建物跡（1間×1間）、中世の掘立柱建物跡・竪穴遺構などが検出されている。尾ヶ原遺跡はこれまで杉林・雜木林のため確認調査が出来なかつた範囲についての確認調査を実施した。トレーナーを14か所設定したが、ほとんどのトレーナーにより旧石器時代から縄文時代・古墳時代・古代の遺物が出土し、ほぼ全面に遺跡が広がることが判明した。

平成13年度は、農業大学校開拓および耕種試験場開拓の削平部分を中心に平成13年5月7日から平成14年3月26日まで実施した。馬塚松遺跡は耕種試験場の本

建設予定地で、縄文時代早期・晩期、弥生時代前期の掘立柱建物跡（2間×2間）、中世の掘立柱建物跡 15棟・溝状遺構等が検出されている。大門口遺跡は研究茶園の予定地で、前年度に引き続いて調査したものである。縄文時代早期・晩期が出土している。尾ヶ原遺跡は農業大学校の飼料畑予定地である。縄文時代早期の集石遺構、晩期の集石遺構、弥生時代中期の小尻用合口壺棺、古墳時代の竪穴住居跡 8 基など豊富な資料が得られた。神原遺跡は支線道路で削平される部分の調査である。遺物は縄文早期・晩期が少量出土しただけであったが、古代の溝状遺構が検出され、溝の中から須恵器・上師器がまとまって出土している。小中原遺跡は、整地作業終了後に設計変更があり急遽調査したものである。旧石器、縄文時代早期の遺物が出土している。諏訪臨道跡・宗円壇遺跡は道路拡張に伴う調査である。縄文時代晩期の遺物が出土している。諏訪牛田遺跡は、耕種試験場の本筋及び付帯施設建設予定地で、縄文時代早期・晩期（柱穴列）、中世（掘立柱建物跡）の遺構・遺物が出土している。中尾遺跡は圃場修繕で削平される部分の調査である。縄文時代草創期・早期・晩期の遺物が出土しているが、草創期では降帶文上器に伴って、集石遺構 5 基、落し穴 4 基、迷穴十坑 13 基など洋口される遺構が多く検出された。南原内堀遺跡も圃場整備で削平される部分の調査である。縄文時代草創期・早期の遺物が出土している。平成14年度は、耕種試験場開拓の削平部分を中心に平成14年5月7日から平成15年3月20日まで実施した。桜谷遺跡は研究水田予定地で、旧石器時代のブロック 1 基、縄文時代草創期のブロック 1 基、早期の集石遺構 35 基、石器製作跡 1 基、晩期の土坑 3 基、弥生時代中期の竪穴住居跡 1 基などが検出された。荒田遺跡も研究水田予定地で、旧石器時代（ナイフ形石器文化期のブロック 1 基、縄石器文化期のブロック 2 基）、縄文時代草創期のブロック 1 基、早期の集石遺構 32 基が検出されている。馬塚松遺跡は主作道建設部分の調査で、縄文時代早期・晩期の遺物が出土している。神原遺跡は病中付帯施設建設予定地の調査で、旧石器時代の環群 9 基、縄文時代草創期の環群 4 基、晩期の掘立柱建物跡（1間×1間）3 棟、柱穴列 2 基、土坑 2 基、中世の古道 1 条等が検出されている。諏訪臨道跡は研究水田予定地で、縄文時代早期の遺物、晩期の掘立柱建物跡 8 棟・柱穴列 14 基、古代から中世の溝

状遺構12条、掘立柱建物跡10棟、竪穴遺構2基が検出されている。宗円塙遺跡は圓芸花キ縄予定地で、旧石器時代（ナイフ形石器文化期のブロック3基・礫群・細石器文化期のブロック1基・礫群）、縄文時代早期の集石遺構、晚期の土器集中域などが検出されている。

平成15年度は農業大学校・耕種試験場の畑地で削平部分を中心に平成15年5月6日から平成16年2月8日まで実施した。窪見ノ上遺跡では縄文時代早期前葉の良好な資料と、石斧製作の痕跡ではないかと思われる資料が得られた。南原内堀遺跡では農業開発総合センター遺跡群では数少ない縄文時代中期の遺物や晚期の埋設土器が出土している。市堀遺跡では中世の掘立柱建物跡が検出され、頸無追田遺跡では旧石器時代の遺物と落し穴が検出されている。また、頸無遺跡では平成14年度に神原遺跡で検出された古代の溝の延長部分が検出された。また、鹿児島県立埋蔵文化財センター（国分市）において報告書作成のための整理作業も開始した。

平成16年度から本格的に整理作業に入り、吹上町に所在する窪見ノ上遺跡・建石ヶ原遺跡・古甲遺跡・西原遺跡・吹上小中原遺跡・馬廻遺跡・三反牟山遺跡の報告書を刊行することとした。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

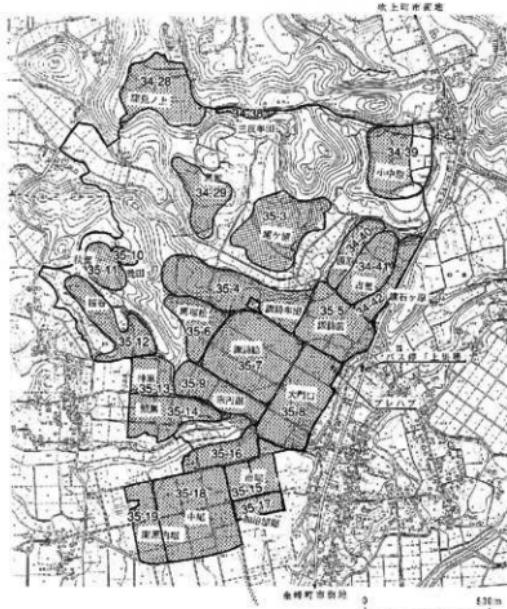
### 第1節 遺跡の位置

農業開発総合センター建設予定地は日置郡金峰町大野と吹上町和田・中之里・入来にまたがって計画され敷地面積180haと広範囲におよぶものである。

金峰町は日置郡の最南部を占め、北側は吹上町、東から東南部にかけては川町・鹿児島市、南側は万之瀬川を隔てて加世田市と接している。また、西側は吹上浜によって東シナ海に面する。金峰山がほぼ中央にそびえ、東から西へ山地・シラス台地・低地・海岸砂丘へと続く地勢を示す。また、万之瀬川の支流堀川・境川・岩元川・長谷川が山地や台地を縫うように西流している。これらの河川に開析された谷が発達し、谷に面した台地上に多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、縄文時代の阿多貝塚、弥生時代の高橋貝塚・松木園遺跡、古墳時代の中津野遺跡が知られているが、近年万之瀬川の河川改修に伴う調査で、持株松遺跡・芝原遺跡など古代から中世の重要な遺跡も発見されている。

吹上町は日置郡南部の中心的な位置を占め、北は日吉町、東は鹿児島市、南は金峰町に接し、西は吹上浜によって東シナ海に面する。東部の金峰山地から西へシラス台地・低地・海岸砂丘と続く地勢は金峰町と同様である。また、永吉川・小野川・伊作川・源川により開析された谷と台地を形成している。その台地上に遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、縄文時代の黒川洞穴遺跡、弥生時代の入来遺跡、古墳時代の草柴里遺跡・辻堂原遺跡などがある。

南薩地域は、鹿児島県内でも遺跡の多い地域で、考古学的調査がいち早く行なわれている。特に金峰町・吹上町は前述のように鹿児島県を代表するような遺跡が目白押しだ。農業開発総合センター建設の予定地も広大な台地の中に大小の開析谷があり、遺跡の立地条件としてふさわしい地形をなしている。そのため、旧石器時代から近世まで幅広い時代の遺跡が24か所も存在する。各遺跡についてはそれぞれ詳述することにする。



第1図 農業開発総合センター内遺跡群位置図

## 第2節 周辺遺跡

### 1 吹上町

吹上町側は主に農業大学校の計画地であるが、大字入来に窓見ノ上遺跡・馬廻遺跡、大字中ノ里に三反半田遺跡・吹上小中原遺跡、大字和田に建石ヶ原遺跡、古里遺跡・西原遺跡が存在し、旧石器時代から縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世とほぼ全時期にわたる。

吹上町はこれまでに約100か所の遺跡が知られている。の中には、黒川洞穴のように縄文時代晚期の標識遺跡となっているものがある。

旧石器時代の遺跡は多くはないが、ナイフ形石器文化の塚ノ越遺跡、ナイフ形石器文化と網石器文化の岩之元遺跡が知られている。縄文時代の遺跡は、山間部やシラス白地土に存在する。黒川洞穴は縄文時代前期の轟式土器から晚期の夜臼式土器まで長期に及んでいる遺跡で晚期の黒川式土器の標識遺跡である。今木場遺跡は押型文土器や呂番型土器など早期から前期の遺跡である。前述の塚ノ越遺跡では縄文時代草創期・早期の遺物が出土している。また、白刃遺跡では縄文時代後期の市来式土器が見られる。

弥生時代の遺跡は多くはないが、弥生時代前期の土器も見られる。入来遺跡では、弥生時代中期の縄溝や甕棺が発見されている。古墳時代は遺跡数も増加し、辻堂原遺跡で見られるように竪穴住居跡が100基を超す集落があり、集落を取り巻くような溝も検出されている。古代・中世の遺跡はまだ未調査のためか少ないようである。近年伊作城跡の調査が行なわれその一端があきらかになりつつある。

### 2 金峰町

金峰町側は主に耕種試験場関連の計画地であるが、大字は大野で大野原と呼ばれている広大な台地である。その中に大門口遺跡・諏訪前遺跡・諏訪半田遺跡・尾ヶ原遺跡・馬塚松遺跡・諏訪協進跡・宗円塚遺跡・神原遺跡・桜谷遺跡・荒田遺跡・頭無遺跡・頭無追跡・市堀遺跡・中尾遺跡・南原内地遺跡・加治屋堀遺跡とはば全域にわたって遺跡が存在する。また、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と各時期の遺構・遺物が出土している。

金峰町も古くより発掘調査が行なわれ、県内外で著名な遺跡が多い。阿多貝塚は縄文時代前期を中心とした遺跡で、人骨の出土した上焼田遺跡と共に貝塚を形

成する希少な遺跡である。小中原遺跡は旧石器時代・縄文時代早期・古代の遺構・遺物が多く出土した遺跡であるが、現在残っている阿多という地名と同じ「阿多」という文字が刻まれた上師器・須恵器が出土したことで注目された。上水流遺跡では縄文時代中期・後期・晩期の夥しい遺物が出土している。その中には、南島との交流をうかがわせる遺物（南島系の土器）も見られる。弥生時代になると遺跡数も増加し内容も豊富になる。下原遺跡は縄文時代から弥生時代への移行期にあたる遺跡で、初底の認められる上器片が出土し、早くから稻作が行なわれていたことがうかがえるものである。高橋貝塚は下原遺跡に後続するものであるが、弥生時代前期の土器（高橋式）と共に初底の土器片・柱状扶入石器・ノミ形石器・磨製石器・磨製剣形・石錐・石包丁等出土しており、稲作農耕がいち早く伝わってきたことを物語る遺跡である。また、貝塚を形成することや南海岸のゴホウラ貝が出土することから、海洋性に富んでおり南島と北部九州などとの中継地としての位置付けも重要な視されている。

下路遺跡では、鹿児島県では数少ない合口甕棺が発見され、弥生時代中期に北部九州との交流があったことが知られる。松木園遺跡は、限られた範囲の調査であるが、弥生時代後期の大溝（幅4~5m・深さ3mのV字状）が発見され環状集落の可能性を想定させられる。また、溝中より出土した多量の土器はそれまで希薄だった弥生時代後期の土器編年に欠かせないものである。中津野遺跡からは、弥生時代から古墳時代への移行期にあたる土器群が出土している。万之瀬川改修工事に伴う近年の調査では、持株松遺跡・芝原遺跡・渡畠遺跡などから古代・中世の遺構・遺物が最も多く発見されている。特に中世の中国製陶磁器が大量に出土しており、南島・中国との交流が大きく取り沙汰されてきている。荒平占窯跡群は県内でも数少ない古代の須恵器窯で、生産遺跡の研究上欠かせないものである。

周辺遺跡地名表（吹上町）

遺跡名	所在地	時代	遺跡名	所在地	時代
1 馬場園	伊作	古墳	23 野中田	人来	古墳
2 吹上高校	今田	弥生	24 萩五塙	〃	古墳・古代
3 淀園ノ上	〃	古墳・古代	25 小緑	〃	縄文前期
4 小卒田ノ上	〃	古墳・古代	26 人来	〃	弥生
5 今田	〃	弥生	27 松崎	〃	縄文早期
6 西園	〃	弥生	28 岩見ノ上	〃	縄文早期・中期
7 端松庵跡	〃	旧石器	29 馬廻	〃	縄文早期
8 鳥越坂	〃	縄文・古代	30 三石城跡	湯之浦	中世
9 今田B	〃	弥生前期	31 寺田	〃	弥生・古墳
10 今井ヶ島	〃	縄文・古墳	32 湯之浦山上	〃	縄文早期
11 桧ヶ峯	中原	古墳・古代	33 刈塚塚	中之里	弥生・古墳
12 黒瀬戸	〃	縄文後期	34 宮坂	〃	弥生・古代
13 大園B	入来	縄文早期・弥生中期・古墳	35 宮坂B	〃	古墳・中世
14 山迫	〃	古墳	36 前原	〃	古墳
15 塚ノ越	〃	旧石器・縄文早期	37 白寿	〃	縄文後期・弥生前期・中期
16 内門堀	〃	縄文早期	38 三反平田	〃	縄文後期
17 川路塚	〃		39 小中原	〃	旧石器・縄文早期・古墳
18 川路塚B	〃	縄文・古墳・中世	40 西原	和田	縄文・古墳
19 春見松	〃	古墳	41 古里	〃	縄文晚期・中世
20 小堀	〃	縄文早期	42 延石ヶ原	〃	縄文早期・晚期・中世
21 下常見	〃	縄文早期	43 天ヶ城跡	〃	中世
22 中原ヶ崎	〃	古墳	44 田中城跡	中和山	中世

周辺遺跡地名表(金峰町)

遺跡名	所在地	時代	遺跡名	所在地	時代
1 塚山	大野	古墳	22 寺下	大野	中世
2 大塚	〃	古墳	23 京田	〃	縄文・古墳・中世
3 尾ヶ原	〃	縄文早~中期・弥生・古墳	24 京田原	〃	古墳
4 諏訪半山	〃	縄文・古墳・古代・中世	25 鎮守尾	〃	古墳・中世
5 諏訪前	〃	縄文早期・晚期	26 南原A	〃	縄文中期・後期
6 馬塚松	〃	縄文晚期・中世・近世	27 砂渡	池辺	古墳
7 諏訪脇	〃	縄文早期・晚期・中世	28 小堀	〃	古墳・古代
8 大門口	〃	縄文早期・晚期	29 萩ノ上	〃	古墳
9 宗円塚	〃	旧石器・縄文早期・中世	30 地頭塚	〃	古墳・古代
10 荒田	〃	旧石器・縄文早期	31 塚屋塚	〃	古墳
11 秋場	〃	旧石器	32 玄同塚	〃	古墳・中世
12 桜谷	〃	旧石器・縄文早期・弥生	33 主水塚	〃	弥生・古墳
13 神原	〃	旧石器・縄文早期・古代	34 秋葉下	〃	古墳
14 頭無	〃	縄文早期・古代	35 鳥田	〃	古墳
15 市堀	〃	縄文早期・中世	36 宮園	〃	古墳・古代
16 頭無迫田	〃	旧石器・縄文早期・中世	37 半礼ヶ城跡	〃	中世
17 加治墨堀	〃	縄文	38 小城田	〃	縄文
18 中尾	〃	旧石器・縄文草創期・早期	39 本寺	〃	古墳
19 南原内堀	〃	縄文後期・晚期	40 前平	〃	縄文・古墳
20 南原外堀	〃	古墳・古代	41 宮の前	〃	縄文・古代
21 原口	〃	古墳・古代			



第2図 周辺遺跡図（吹上町・金峰町）（1/25,000）

## 第Ⅲ章 層位



農業開発総合センター予定地は、日置郡金峰町と吹上町にまたがる南北2km、東西1.5kmの広大な範囲に及ぶ。地形も標高86mから13mと高低差があり、山・台地・沖積地・開拓谷と変化に富んでいる。そのためには、それぞれの地点で層位が異なっている。第3図は台地部分の標準的な地層の模式図である。

また、以下の各層の説明も標準的なものであり、各遺跡では微妙な違いがある。詳細についてはそれぞれの遺跡において述べることとする。

### I層 灰黑色土

現在の耕作土。白色の小軽石を含むことによってII層との区別が可能である。地点によってはa・b・cの3層に細分できる。Ic層は黒色に近い色調であるが、3mmの大白色軽石が混在している。中世から近世初めの層である。I層の平均的な厚さは20cm程度であるが、圃場整備により削除されたり、盛り土されたりしており一定ではない。

### II層 黒色土

弥生時代・古墳時代・奈良時代・鎌倉時代の遺物包含層である。圃場整備により削除されている部分が多いが、谷の部分などを中心に良好に残存している。

層厚10-30cm。

### III層 黄褐色火山灰土

鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（B P 6400年）とその腐植土である。上位（IIIa層）はII層との漸位層であり、やや黒色をおびる。縄文時代晩期及び弥生時代前期の遺物包含層である。中位（IIIb層）は縄文時代前期から後期の遺物包含層である。下位（IIIc層）はアカホヤ火山灰の一次堆積と考えられるが残存状況は悪く、IV層の黄褐色土との境目が明瞭ではない。層厚30-40cm。

### IV層 黄褐色土

III層と類似するが、より褐色味を帯び、粘質である。縄文時代早期の遺物包含層である。層厚20-30cm。

### V層 黑褐色土

硬質でよくしまる。2-3cmの大黄褐色のバミスが混入する。縄文時代早期の遺物包含層である。層厚30cm。

### VI層 暗黄褐色火山灰土

桜島起源の薩摩火山灰（B P 11,500年）である。非常に薄くブロック状に堆積している。層厚は厚い所で15cm程度堆積している。

### VII層 明茶褐色土

粘質土であるが、火山灰の混入によるザラついた感触を持つ。縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10cm。

### VIII層 茶褐色粘質土

いわゆるチョコ層である。粘質が強く含水率が高い。旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10cm。

### IX層 暗茶褐色粘質土

VIII層とほとんど同じ土質であるが、VIII層に比べてやや褐色土味を帯び、シルト質化している。旧石器時代の遺物包含層である。層厚30cm。

### X層 黄褐色シルト質（シラス質）

シラスの腐食したもので、5cmの大黄色軽石を含む。上位には旧石器時代（ナイフ形石器文化）の遺物包含層である。層厚80cm。

### XI層 白色シラス

始良カルデラ起源のシラス（B P 24,500年）である。近辺の露頭では十数mの堆積が見られる。

第3図 模式柱状図

## 第IV章 窪見ノ上遺跡

### 第1節 調査の概要

#### 1 遺跡の立地及び調査の概要

窪見ノ上遺跡は、吹上町入来字窪見ノ上に所在する。平成10年度に確認調査、平成15年度に本調査を実施した。本遺跡は、農業開発総合センター敷地の北側に位置し、四方に傾斜する丘陵上の台地（標高70m）上に遺跡が広がる。今回、研究果樹園造成に伴う削平部分について、発掘調査を行った。

本遺跡の削平予定地は、台地の2か所に存在する。便宜上1地点・2地点と分けて調査を実施した。この区域は、台地の舌状部分に該当し、西に東シナ海、南に大野原台地から加世田平野までを眼下に見下ろし急激に地形が降下していく地点であり、1地点と2地点の間は谷状を呈している。2地点は工事予定地の一部が茶畠造成時に縄文時代早期の包含層まで搅乱を受けている。

遺構は、縄文時代早期の集石構造6基と集積構造1基、黒色土を埋土とした中世・近世の古道が検出された。

遺物は、1地点の1トレンチのⅣ層から旧石器時代

の遺物が出土し、遺物包含層は、1・2地点ともⅣ層、V層を中心として縄文時代早期の土器や石器が多量に出土した。

特に、2地点では縄文時代早期の古い段階である岩本式土器が多く出土した。1地点の出土遺物は早期中期に位置づけられる石坂式土器や押型土器が多く出土した。2地点の工事予定地はマウンド状の地形をなし、地層の堆積がはっきりしなかった。そのため、早期前葉に位置づけられる岩本式土器が縄文時代草創期・旧石器時代に比定される粘質土層から出土する場合もあった。また、石斧や石斧製作過程でできる片剣が多く出土することから石斧等の石器製作所の可能性を考えられる。

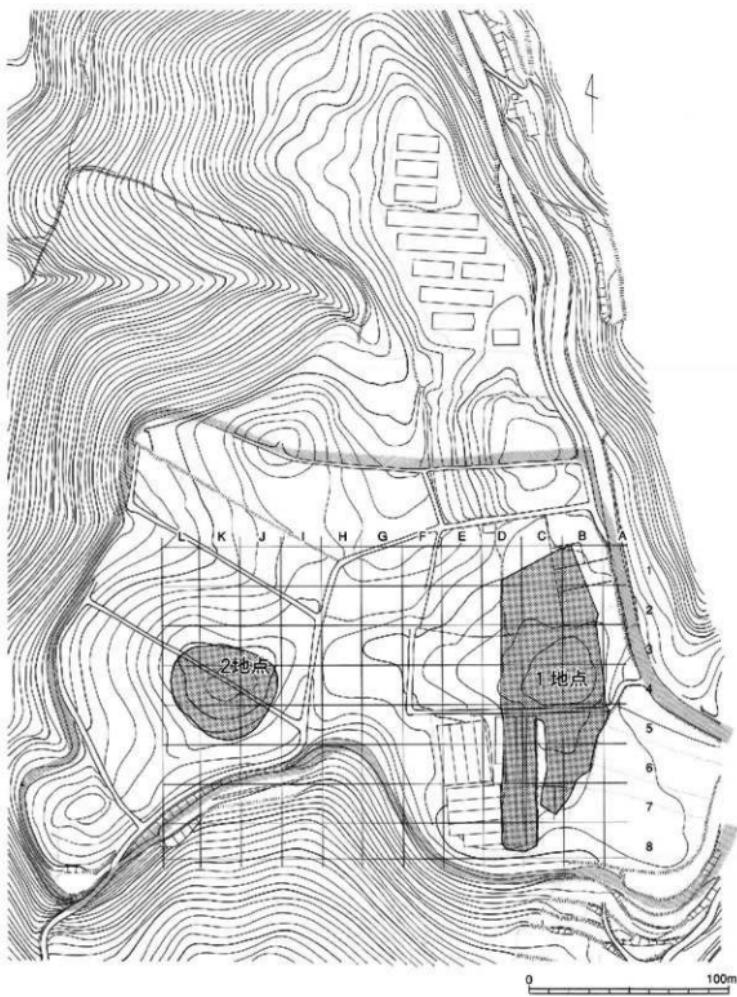
縄文時代の後期については、土器片があまり出土せず、片剣類が多く出土した。中世・近世については、遺物がほとんど検出されず、はっきりとした時期の判断ができないかった。

#### 2 遺跡の層序

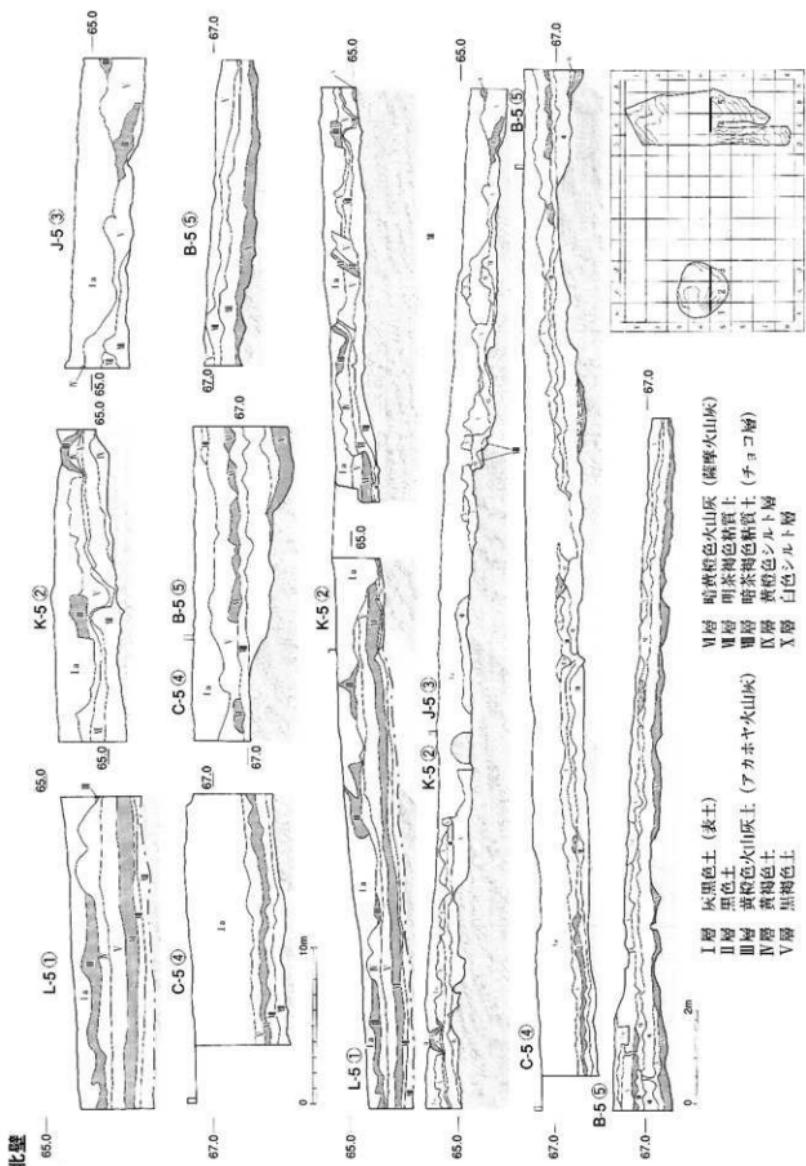
窪見ノ上遺跡の土層は、農業開発総合センター遺跡群における標準的な層序と同じである。ただし、両地点とも旧石器時代から縄文時代草創期に比定されるⅣ層（チョコ層）直下に安山岩の岩盤があり、シラス層に比定されるⅤ層は確認できなかった。



第1図 窪見ノ上遺跡位置図 (1/25,000)

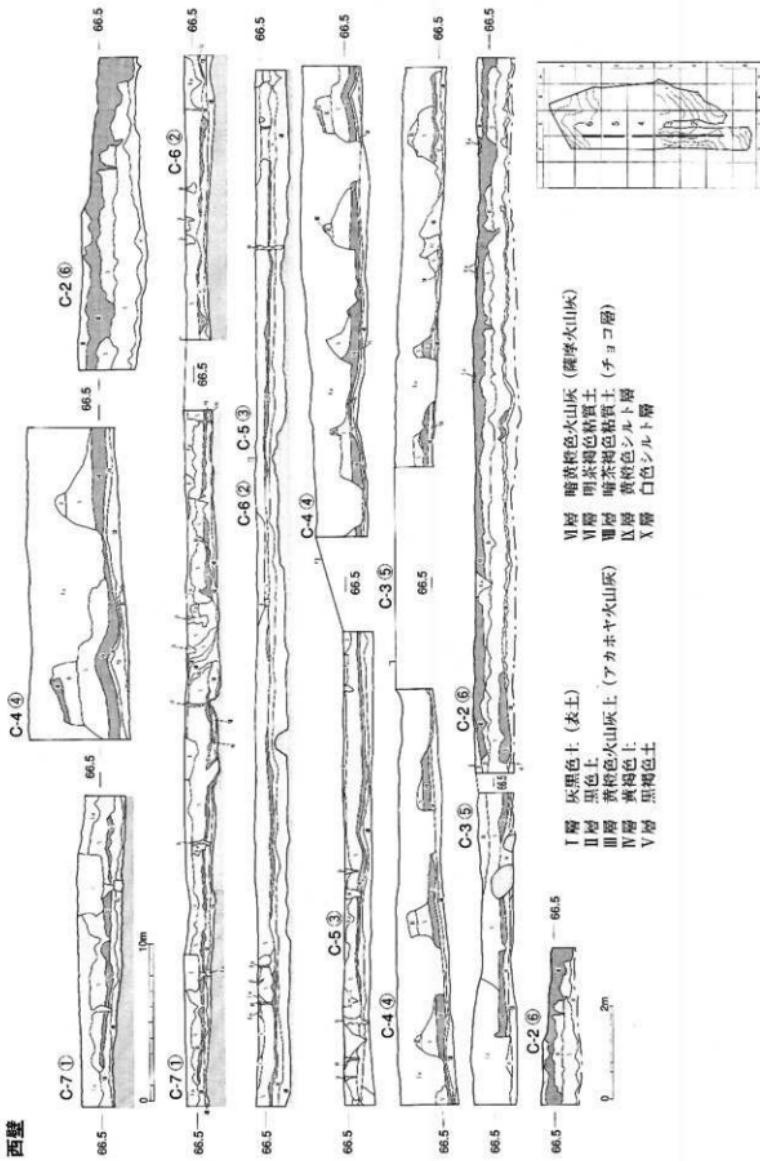


第2図 周辺地形図及びグリッド図



第3図 土層断面図1

西壁



第4図 土層断面図2

## 第2節 発掘調査の成果

窓見ノ上遺跡の遺物包含層は、IV・V層とⅥ層の一部で、いずれも旧石器時代及び縄文時代早期に該当する遺構・遺物を包含する層であった。

### 1 旧石器時代の調査

1 地点の1トレンチのⅤ層から旧石器時代の遺物が出土したが、剥片及び碎片であり資料として図化することができなかった。この地域においては、工事による削平が旧石器相当層まで及ばないため協議の上、確認調査で終了した。

### 2 縄文時代早期の調査

縄文時代早期は、主にIV・V層出土のものである。しかしながら第2地点においては、Ⅵ層・Ⅶ層が欠陥したり、薄かったりし整然としていないため、Ⅶ層からも縄文時代早期の遺物が出土する。特に、I類土器とした岩本式土器は、質量共に特筆すべきものがある。

#### (1) 遺構

遺構は、集石遺構が6基検出され、検出順に1～6号とした。ほぼ調査区全区域Ⅴ層上面で検出され、1地点で4基（1～4号）、2地点で2基（5・6号）、計6基が確認された。どの集石遺構も掘り込みはみられない。他に2地点で集積遺構が1基検出された。

##### ① 1号集石遺構

D-1区で検出された。118個の石で構成されている。重量は、平均10～150gの比較的小ぶりの礫が散逸している。一部被熱による赤化や炭の痕が確認された。

##### ② 2号集石遺構

C-5区で検出された。45個の石で構成されている。10～200gの礫が最も多く、最大2,000gの礫が数点確認された。

##### ③ 3号集石遺構

B-5区で検出された。42個の石で構成されている。重量は、10～100gの範囲が最も多く、安山岩を中心としている。一部被熱による赤化や炭の痕が確認された。

##### ④ 4号集石遺構

C-7区で検出された。85個の石で構成されている。中央部がイモ穴で搅乱され、集石全体を確認することができなかった。検出された礫から僅かな被熱による

赤化が確認された。

#### ⑤ 5号集石遺構

J-4区で検出された。130個の石で構成され本遺跡の集石の中で最多量検出された。礫の重量は様々で小ぶりの礫が大半を占めるが、1,000gを超す大きな礫が23個も検出された。一部被熱による赤化や炭の痕が確認された。

#### ⑥ 6号集石遺構

J-3区で検出された。27個程度の石で構成されている。100～350g程度の礫が散逸されている。

#### ⑦ 集積遺構

I-1～2区で検出された。16個の石で構成されている。150～350g程度の礫が堆積している。すべての礫が丸みを帯び、砂岩を使用している。被熱を受けておらず調理施設の機能はなかったと思われる。

#### ⑧ 集積遺構内出土遺物

集積遺構内出土遺物は、磨石、敲石の12点である。

##### 磨石・敲石類

磨石や敲石・凹石については、1個体に磨面や敲打痕、敲打痕の集中による凹みなど複合的な性格を有する石器が多いので、磨石・敲石類を同一群として取り扱うこととする。これらの石器は使用痕の形態により次のように分けた。

##### I類（第10・11図）

1・2・4～6・9・10は、磨面のみが認められる。1は安山岩製であり、その他は砂岩製である。

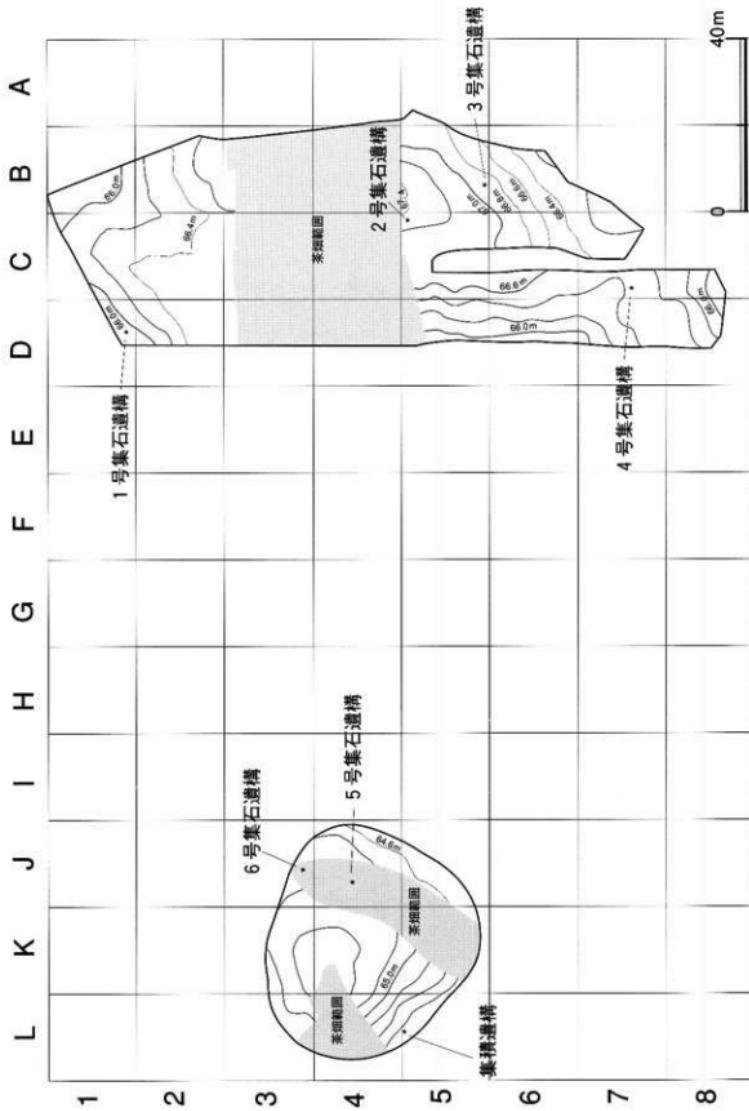
多くは上面鏡も側面鏡も横円形に近く左右が対照的な器形を有するが、4は側面鏡が三角形状の器形である。下面や上端側縁部に磨り痕が明瞭に残される。9は上面にのみ明瞭な磨面が見られる。10は上面鏡が若干歪みを呈する長軸方向に長い横円形の器形であり、側面鏡は上下端部が反っている。弯曲した上面には磨面が見られない。

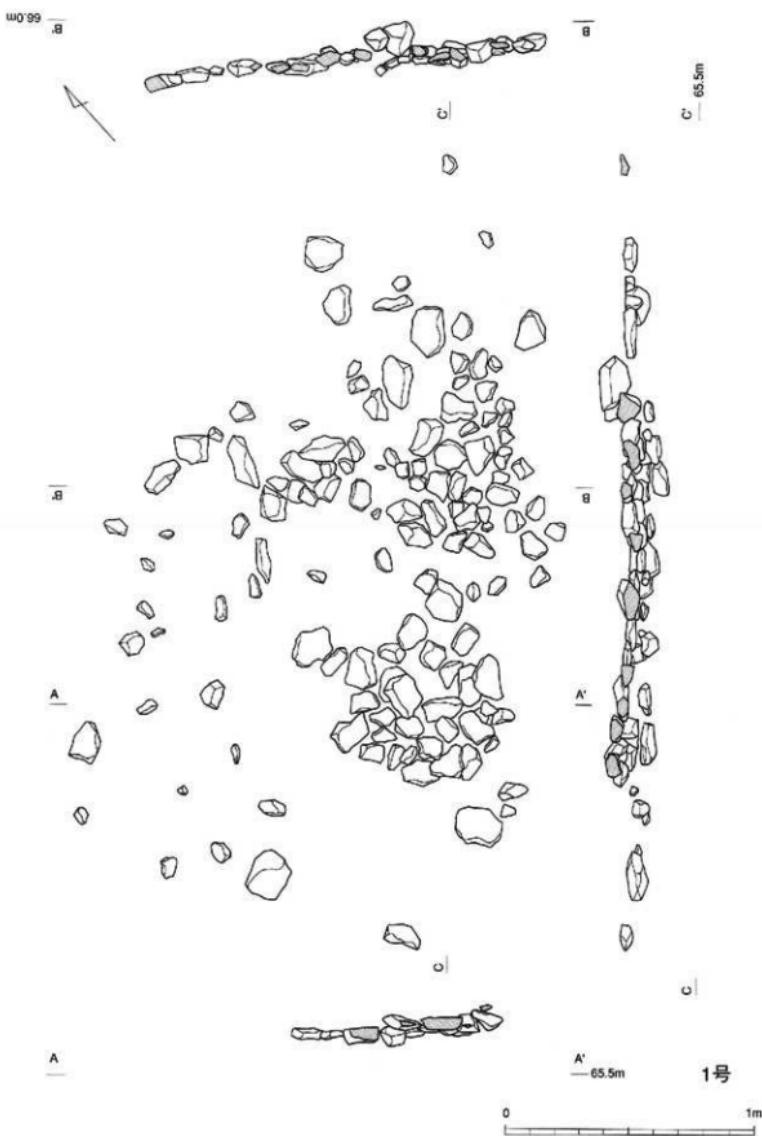
以上の3点を除き、使用痕が残る部位に特徴的な彌り等は確認できない。

##### II類（第10・11図）

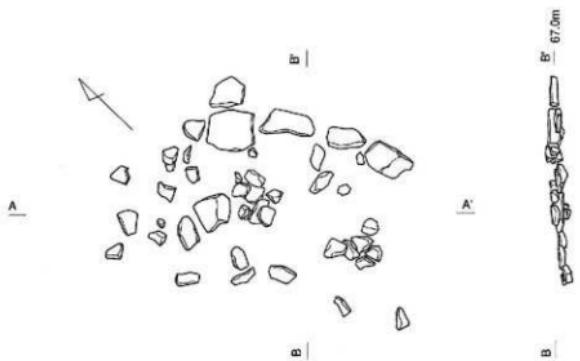
3・7・8・11・12は、磨面と敲打痕が認められるものである。

第5図 V層遺構配置図

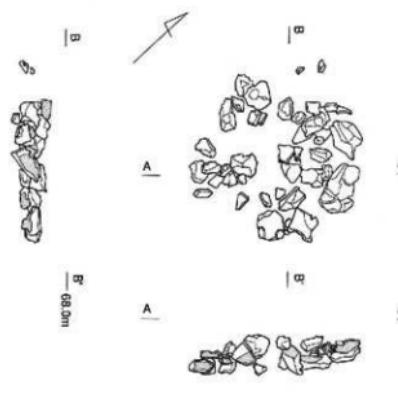




第6図 集石遺構1



A A' 67.0m 2号



3号

第7図 集石遺構 2



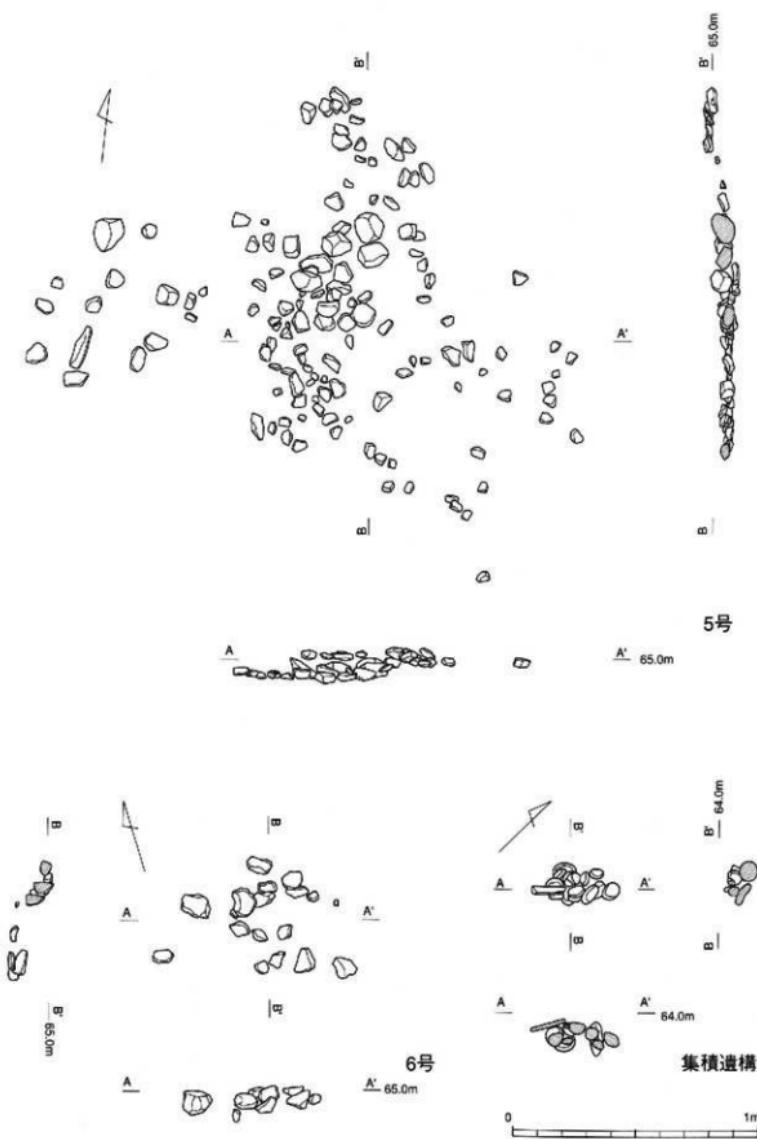
第8図 集石構造3

3・12は砂岩製で、7が頁岩製、8は安山岩製である。3は三面体の器形であり、上面側左平坦斜面と上下端側縁部に主要な磨面が確認できる。下面には、1cm幅程度の敲打痕が残る。7は上下両面に磨面、側面に敲打痕を有し、下面中央部には敲打による若干の凹みが確認できる。8は鮮明な敲打痕が上下面に4か所

程度見られる。11は棒状を呈し、12は長軸が長い楕円形である。ともに、側縁部には浅い敲きが全周をめぐらしている。11の上面下半部には長楕円状の凹みがあり、敲打後に残った痕跡や縦に走る擦痕が確認できる。12は、上下端部に明瞭な敲打痕が深く残される。

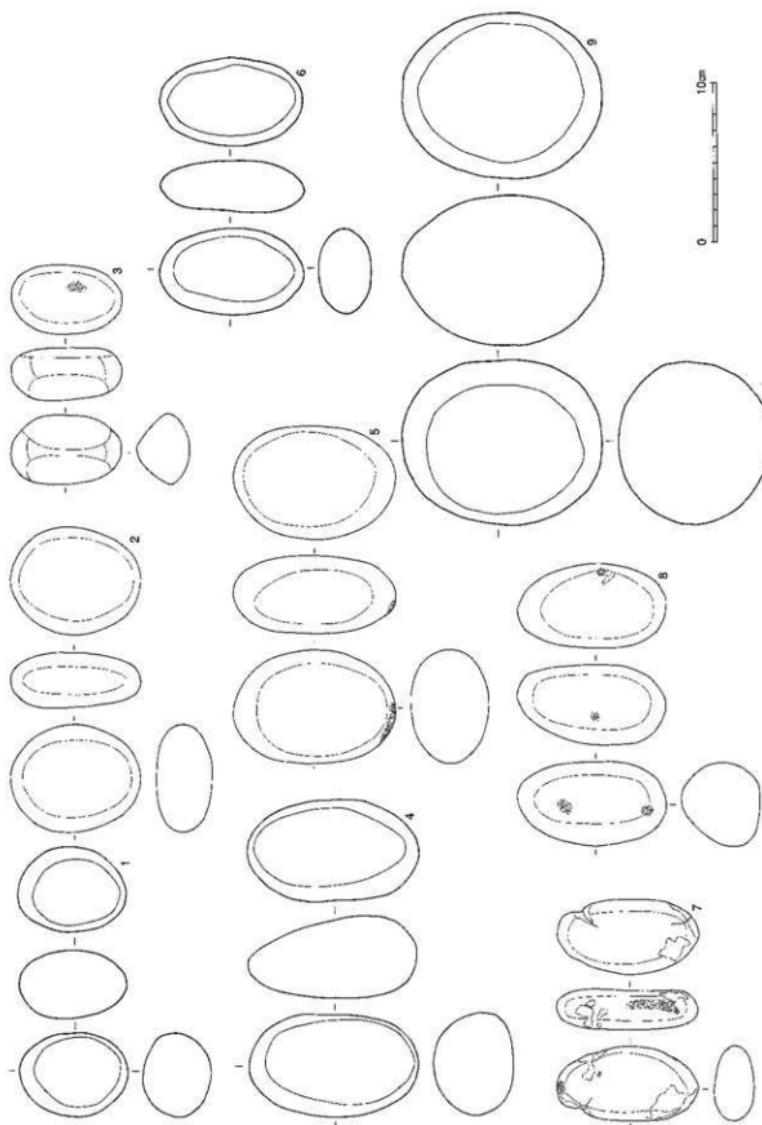
第1表 遺構内遺物観察表

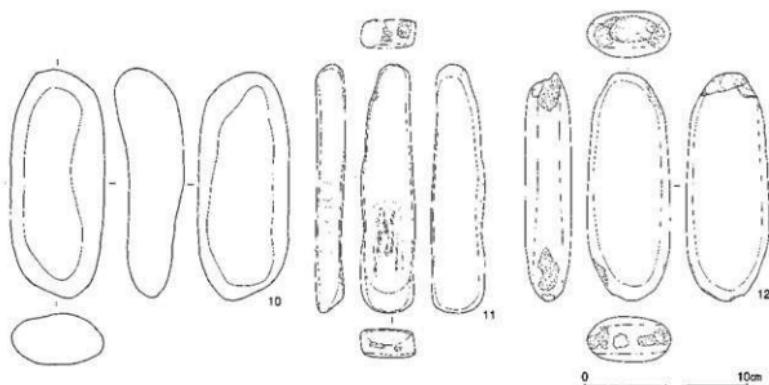
捕獲番号	遺物番号	出土区	層位 遺構	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第10 回	1	s s 7		安山岩	6.8	5.25	4.2	190	磨石
	2	s s 7		砂 岩	8.4	6.8	3.5	250	磨石
	3	s s 7		砂 岩	7.0	4.4	3.4	140	磨石
	4	s s 7		砂 岩	10.6	6.5	4.9	485	磨石
	5	s s 7		砂 岩	10.8	7.2	5.0	480	磨石
	6	s s 7		砂 岩	9.0	5.5	3.3	228	磨石
	7	s s 7		頁 岩	8.9	4.7	2.5	142	磨石
第11 回	8	s s 7		安山岩	9.4	5.4	5.0	345	磨石
	9	s s 7		砂 岩	12.5	10.3	9.4	1450	磨石
	10	s s 7		砂 岩	14.0	5.7	3.3	420	磨石
	11	s s 7		砂 岩	15.5	3.3	1.8	150	磨石
	12	s s 7		砂 岩	14.1	5.2	2.8	290	敲石



第9図 集石造構4・集積造構

第10图 集精池内出土遗物1





第11図 集積構内出土遺物 2

#### (2) 遺物 (第14~89図)

遺物は、土器、石器が出土した。遺物は、可能な限り全点ドット方式による取り上げをを目指した。

##### 土器 (第14~54図)

本遺跡において出土した土器は11種類に分類され、紀文時代早期相当の土器がほとんどである。

##### I類土器 (第14~53・86~87図)

I類土器は早期前葉の遺物であるが、もっとも多く出土した一群である。

本報告書ではI類上唇を口縁部の文様形態から7分類し、以下に詳述する。

##### I-a類土器 (第14~19図)

この類は、口唇部キザミ日の下部に横位の二枚貝腹縁部による刺突を2~4条めぐらしている一群である。完形品は13のみで、14・28は胴部下半部及び底部を欠く。

14~25は、口唇部外側に二枚貝の殻頂部を押圧したキザミ日を有する。13・26~64は、口唇部外側に貝殻や箋状工具による縦位のキザミ日を有する。大半は口唇部の段差も大きくなく、胎上に含まれる礫も極少であるが、30・35・38は他に比して口唇部外側から内面に向けての傾斜が極めて大きく、径7mm程度の礫をはじめとして礫を多く含むなど特徴的であり、同一個体の可能性が高い。他には16・30・34・35・47が径5mm

程度の礫を含むなど目を引く。14は外面ともに全面的に丹と思われる赤色顔料の着色が施され、36については内面に逆L字状の丹の着色が確認できる。

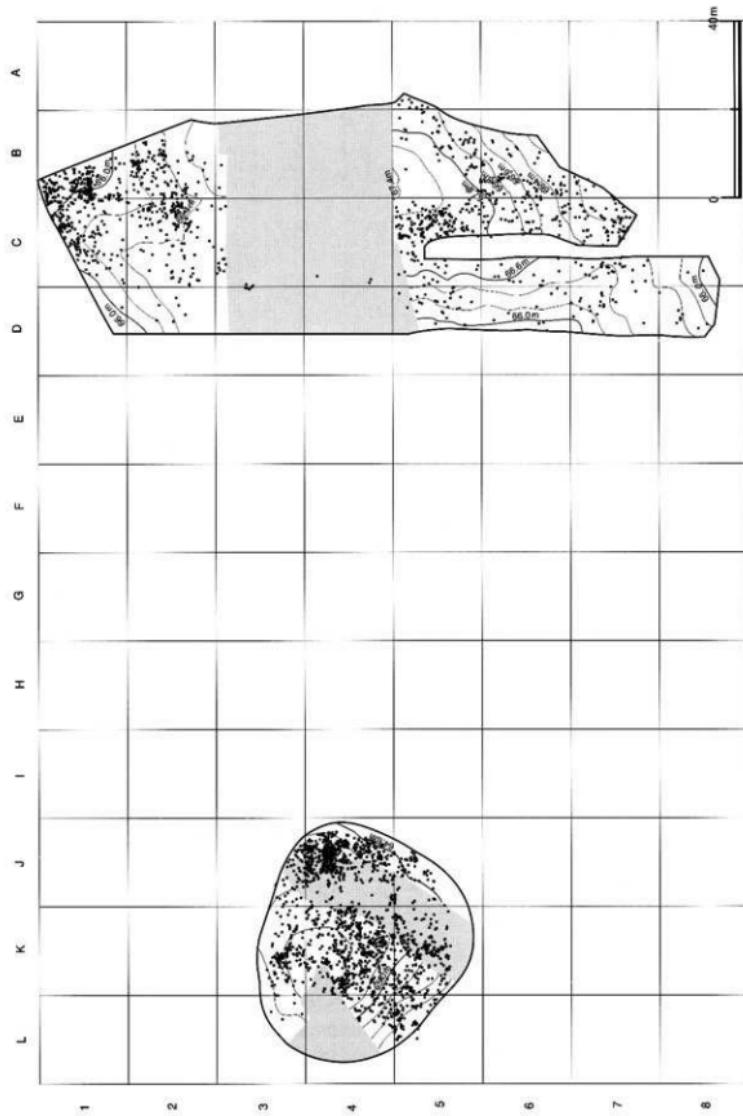
##### I-b類土器 (第20図)

この類は、口唇部キザミ目の下部に、縦位の二枚貝腹縁部による刺突をめぐらす一群である。

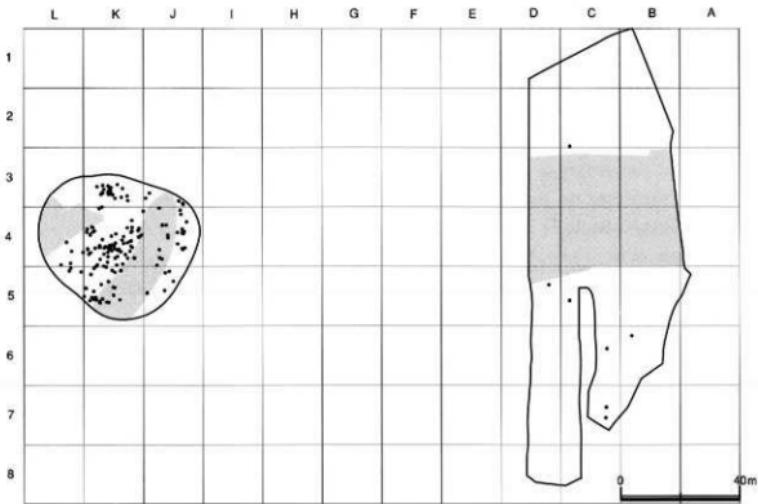
67は底部を除きほぼ完形品に近い形で出土している。口唇部にキザミ日を持たないのが71と74の2点である。71の口唇部断面縁が隅丸状を呈しているのに対して、74は口唇部上面が擦切状に平坦面を有している。いずれも、口唇部外面下位の文様が縦位の貝殻刺穴文であることから、本類に分類した。65・66は、口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押圧し、67~70・73・74は、口唇部外面を貝殻や箋状工具によって刺突している。これらが縦位の刻みであるのに対して、72は刻みを口唇部外面側と内面側から交叉に施している。

口唇部下位の文様については、ほとんどが一段の縦位の貝殻刺穴であるが、69と71は幅1cm程度の縦位の刺突を横高2段めぐらしている。69は3mm幅程度の狹輪の密な施文であるが、71は8mm程度の広幅であり斜め方向からの深い刻みが特徴的である。65・66は丁寧なケズリ調整を施してあるが、胎土には径6mm程度の礫が含まれる。文様等も含めて酷似し同一個体とも思われるが、器厚が若干異なり断定はできない。

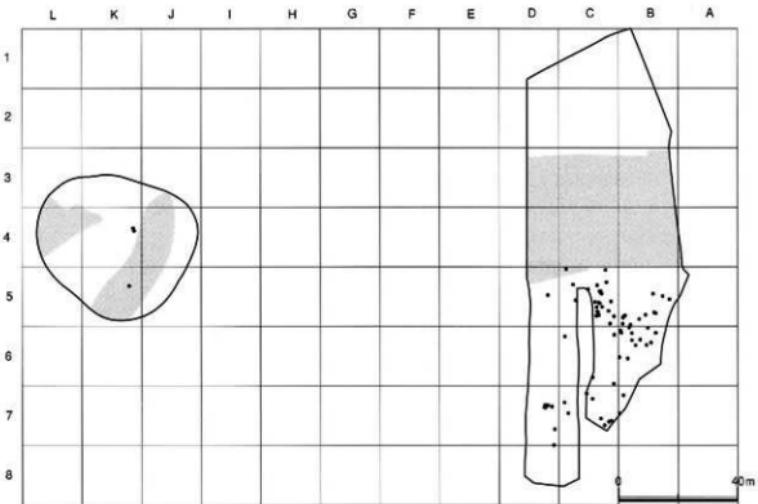
第12圖 V層遺物出土狀況



I類土器



III類土器



第13図 I類土器・III類土器分布状況

### I—c 類土器（第21・22図）

この類は、口唇部キザミ目の下部に、縦位の二枚貝腹縁部による刺穴をめぐらし、その下部分に横位の1条の貝殻刺突を施文する一群である。完形品は78の1点のみである。

75～78については、口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押圧し、79～83については、口唇部外面に貝殻や範状工具によって縦位の刺穴を施してある。ほとんどが、縦位施文下には1条の横位貝殻刺突がめぐらしているが、75・76は口唇部外面側から貝殻による刻みを施した後、内面側から指による押圧で丁寧に調整を施してある。75～77は口唇部下位の文様形態や外面調整が酷似しているが、75・76は口唇部の段差がほとんどないのに対して、77は明瞭に段差を有しており、この3点が同一個体かどうかは定かでない。本類のほとんどは、縦位の貝殻刺突文直下に1条の横位の貝殻刺突文をめぐらしているが、83のみ2条の刺突文が確認される。

胎土については、本類資料が少なく断定はできないが、82・86・87・90・92など小砾を多数含む資料数の割合が高い。

### I—d 類土器（第23図）

この類は、口唇部キザミ目の下部に、斜位の二枚貝腹縁部による刺突文をめぐらす一群である。

93は口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押圧し、94～103は口唇部外面を貝殻や範状工具によって斜位に刺突している。101のみ口唇部刻みを有しないが、口唇部下位の斜位の貝殻刺突の施文形態により、本類に分類した。ほとんどが一定方向に傾斜する斜位の施文であるが、96は上位左下上がりと下位右下上がりの刺突文を組み合わせたくの字状の施文構成である。

胎土については、94・100に小砾が確認できる程度で、特に砾の包含が特徴的な資料は確認できない。

### I—e 類土器（第24・25図）

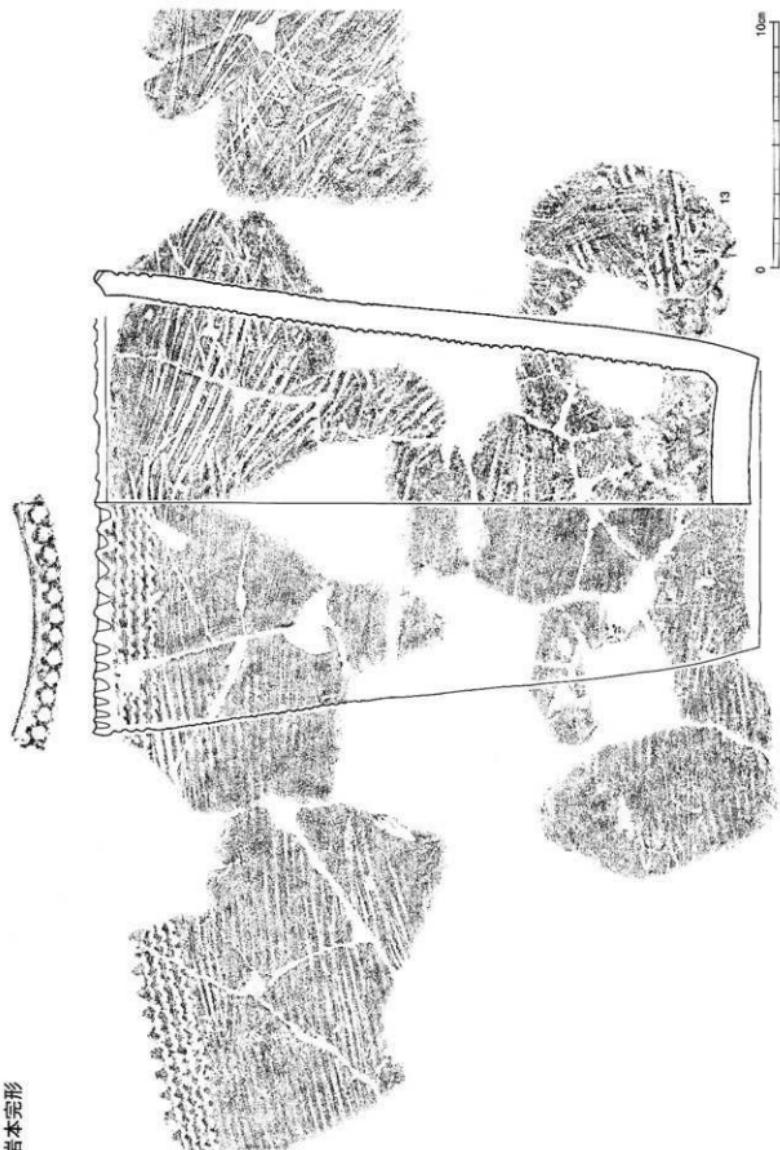
この類は、口唇部キザミ目の下部に、斜位の二枚貝腹縁部による刺突文をめぐらし、その下部分に横位の1条の貝殻刺突文を施文する一群である。

104のみ口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押圧し、それ以外は貝殻や範状工具による刻み施文であるが、108については刻みが確認できない。ほとんどの資料が、口唇部外面下位に斜位の刺突文を施文後、その下位に1条の横位の貝殻刺突文をめぐらしているが、108は施文帯下位にやや斜位気味と横位の刺突文が2条確認できる。105・112については斜位の刺突文後、その直上と直下の2か所に横位の貝殻刺突文をめぐらしているのが特徴される。胎土や色調、施文形態から同一個体であろうと想定される。111・113～115・117・118など砂粒や小砾を含む資料が確認できるが、特に113は9mm程度の大砾が含まれている。

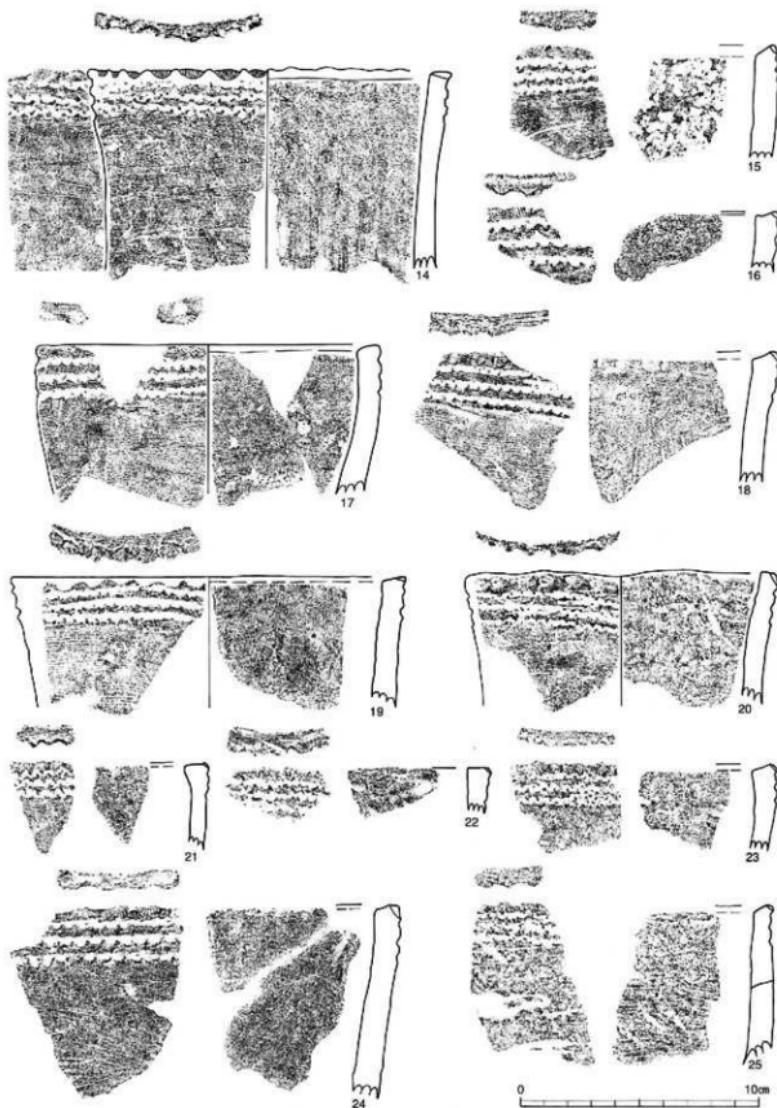
### I—f 類土器（第26図）

この類は口唇部下位に文様を有するが、その形態が上記のa～e類及び後述g類に属さない一群である。

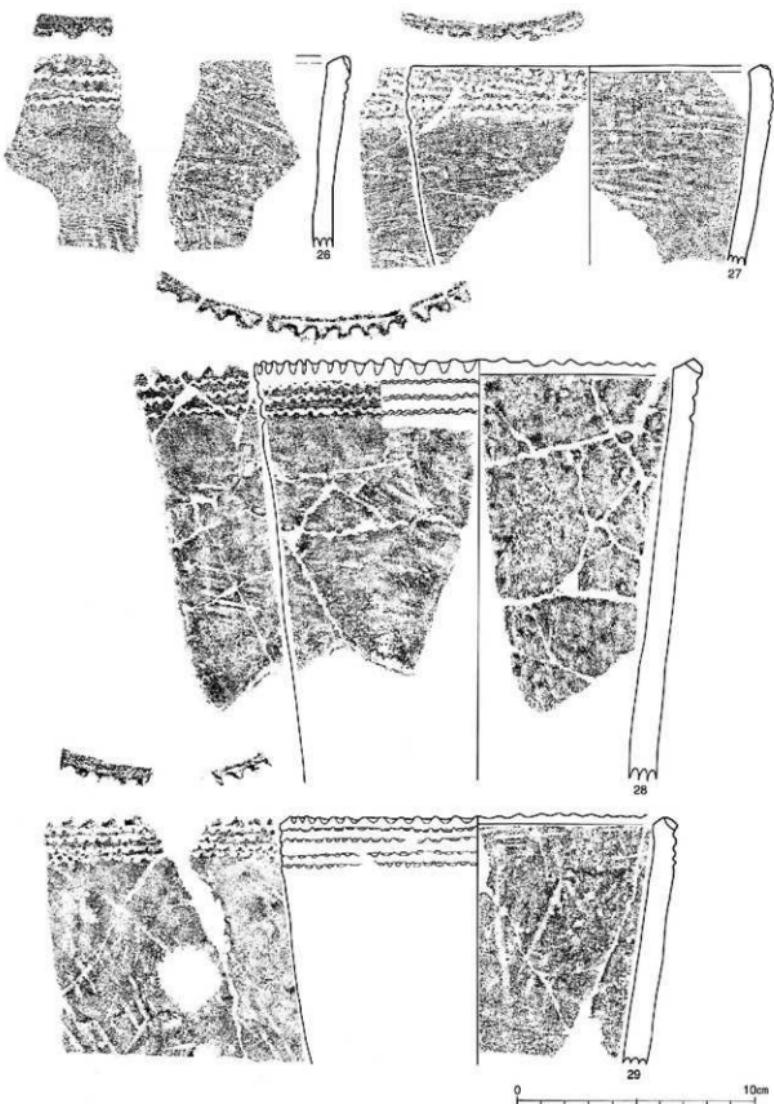
120は口唇部外端部から直下1cm程度を、貝殻刺突部による刺突文を縦位に1条めぐらしており、口唇部刻みと口唇部直下の刺突が統合された文様形態である。その結果、口唇部の断面観が口唇部内面側は高く外面側に向けて大きく傾斜する形状を呈しており、この口唇部形状は本資料1点のみ確認されている。また、口縁部断面の外側への肥厚が顕著なもの特徴的である。121・122は施文幅2.5～3cm程度の縦位の貝殻刺突文と3条の横位貝殻刺突文が交互に施文されている。123は口唇部外面に刻みを施し、その直下に貝殻刺突部を縦位に1条刻しめぐらしてある。124は口唇部外面のキザミ目直下に、貝殻腹縁部を1cm3mm程度の間隔で波状に押し引いている。この資料は外面の貝殻腹縁部による条痕調整が明瞭である。



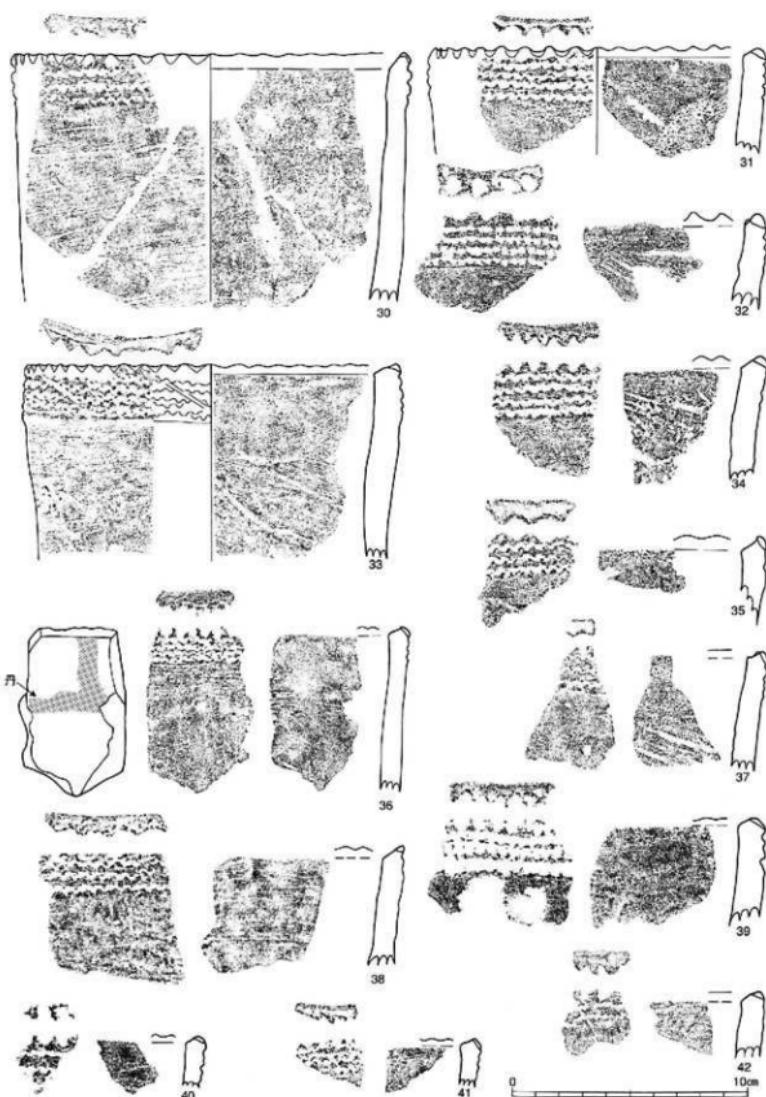
第14図 1 狩土器 1



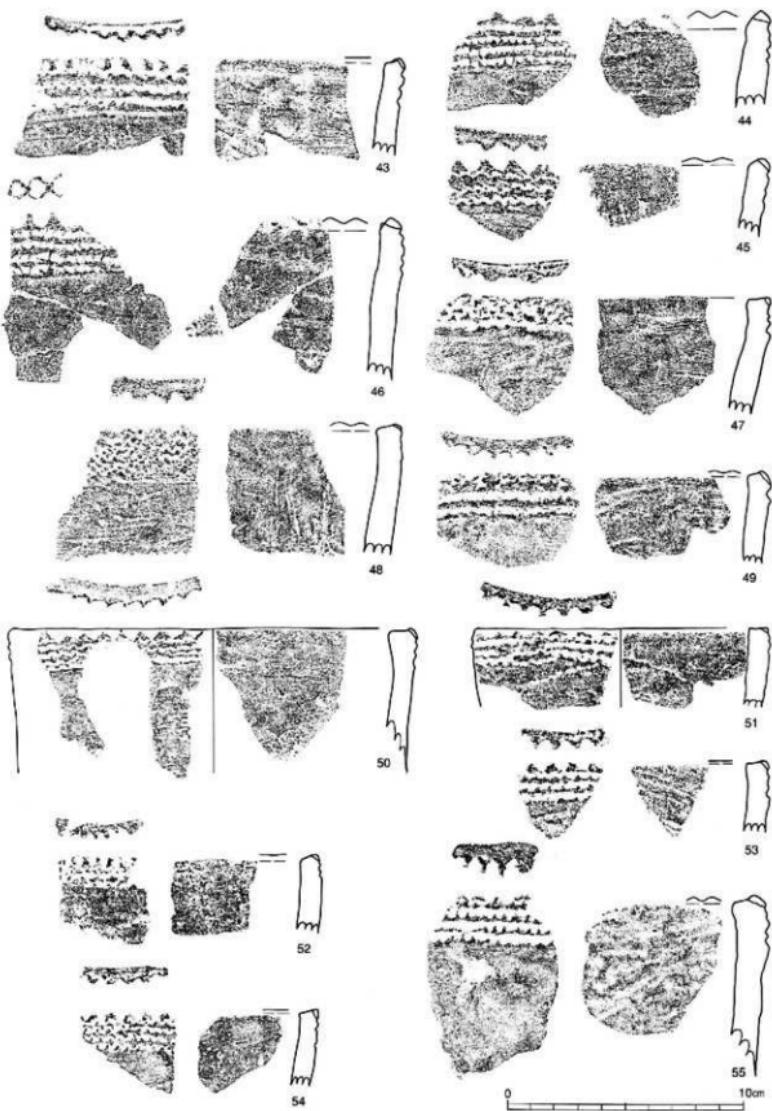
第15図 I類土器2



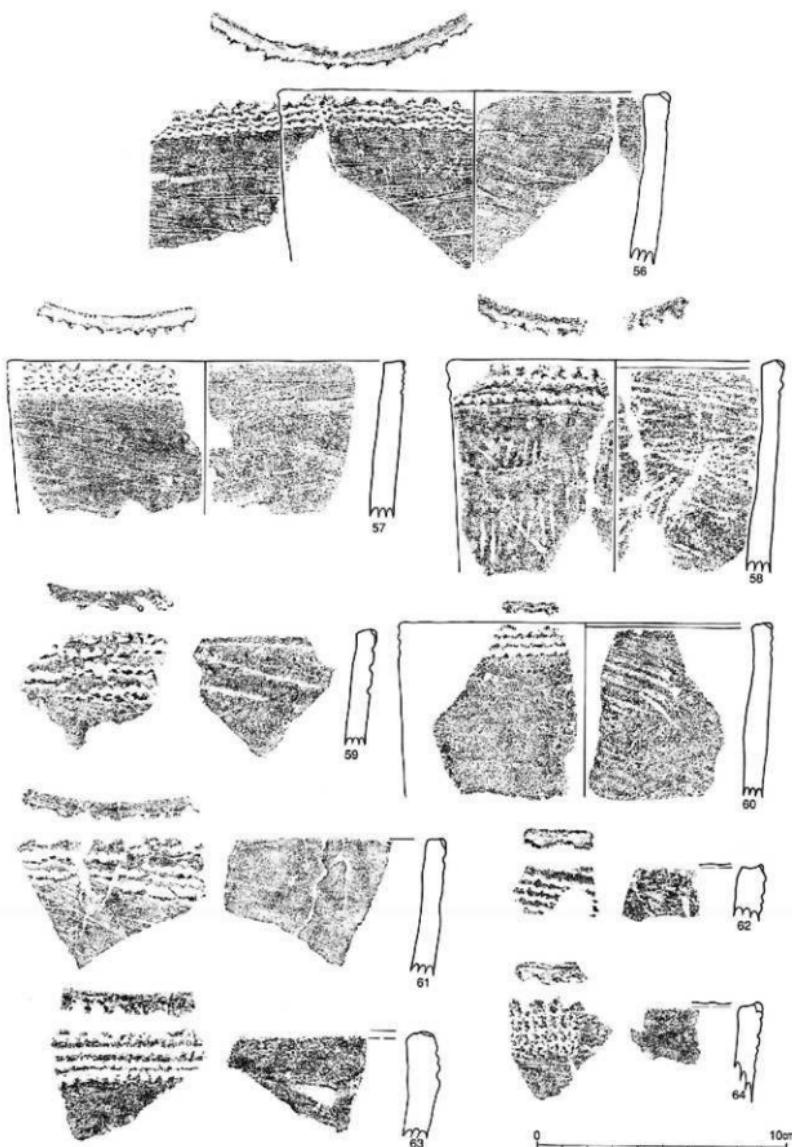
第16図 I類土器 3



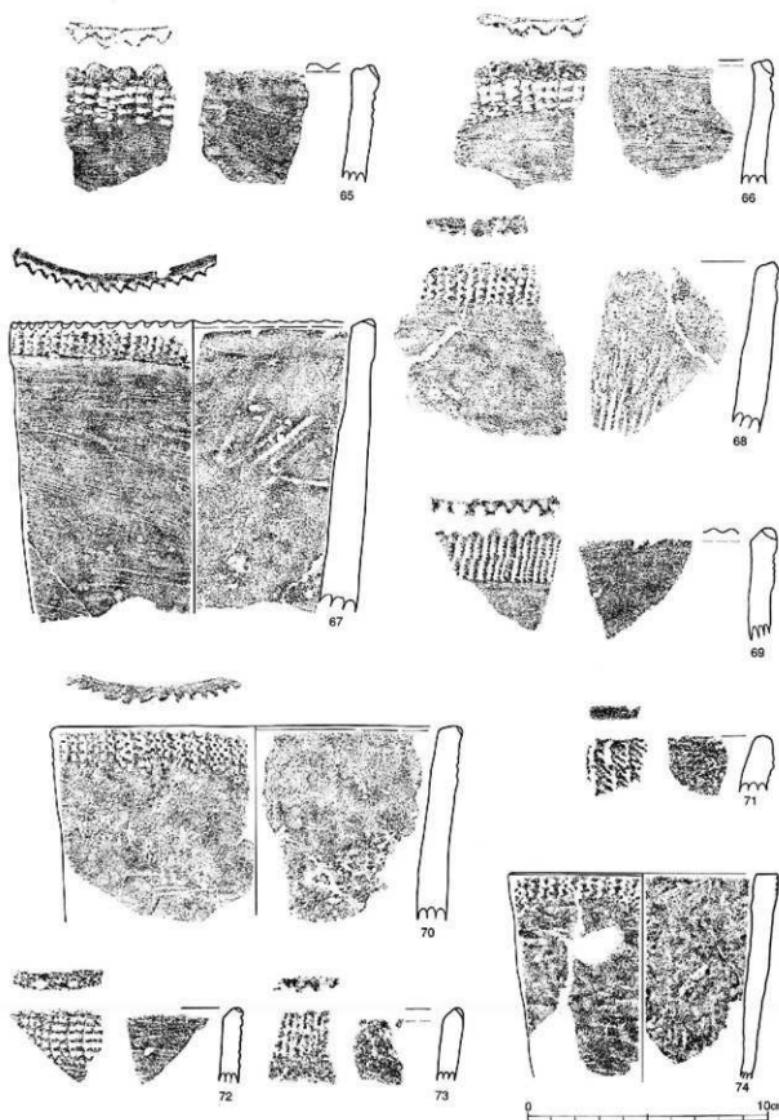
第17図 I 類土器 4



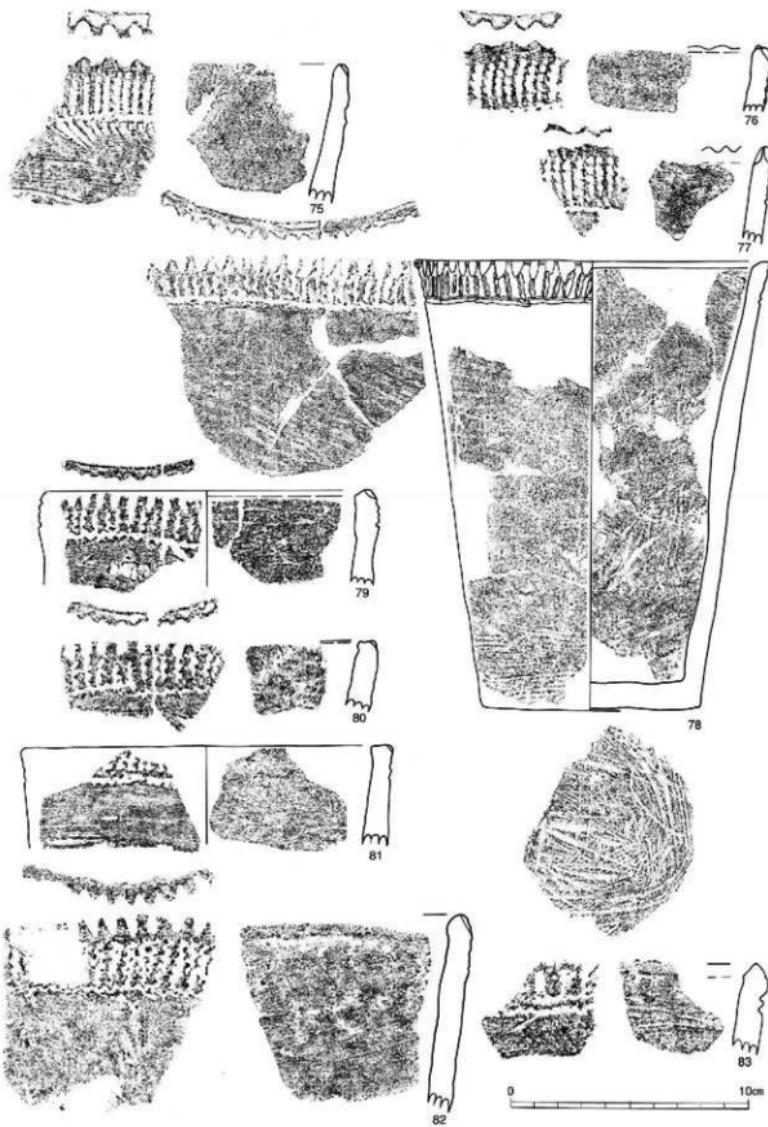
第18図 I類土器 5



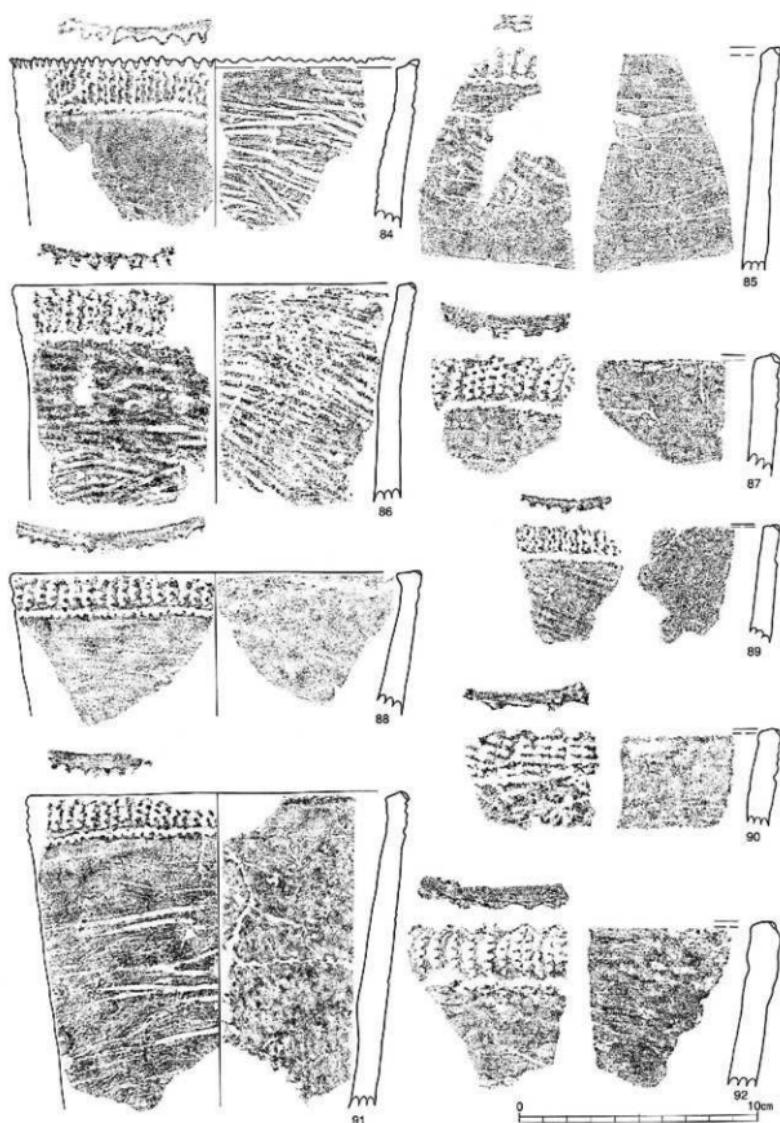
第19図 I類土器 6



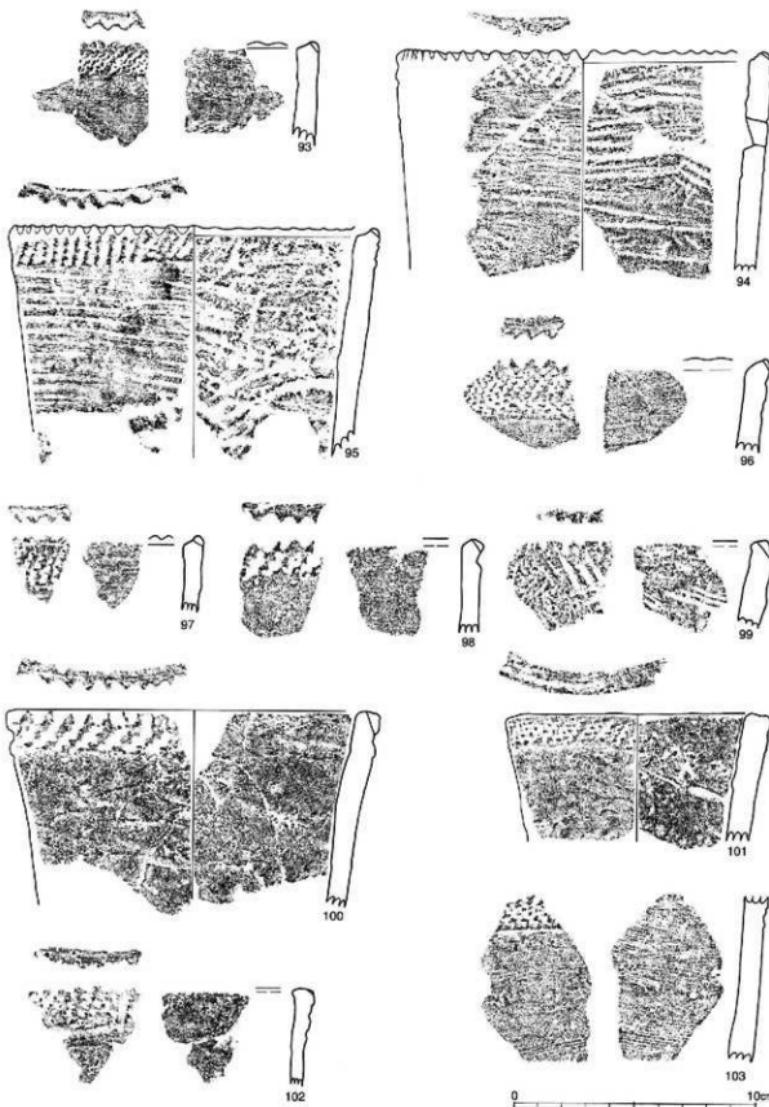
第20図 I類土器 7



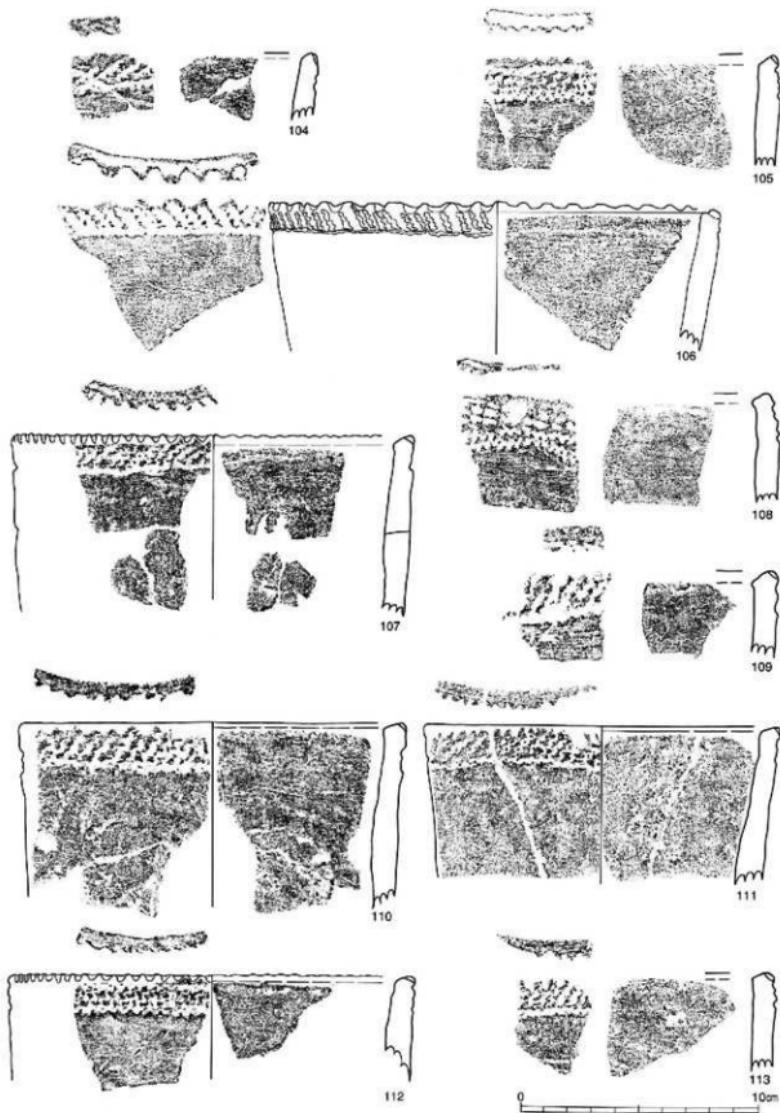
第21図 I類土器 8



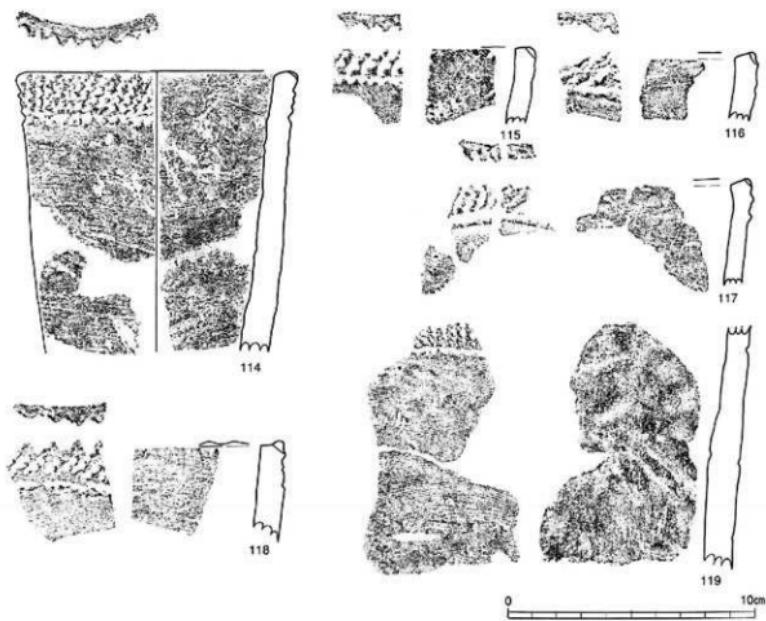
第22図 I類土器 9



第23図 I類土器10



第24図 I類土器11



第25図 I類土器12

#### I-g 類土器 (第26~33図)

この類は、口唇部下部に文様がないものやキザミ目及び文様の磨耗が激しく、文様形態等確認できない一群である。

125は器面の磨耗が激しく、口唇部の刻みの有無や口縁部文様の有無・形状は確認できない。126は口唇部に刻みを有し、口縁部には文様が存在するようであるが、磨耗が激しく、文様形態は確認できない。127・128は口唇部の刻みや口縁部の文様を有しない。口唇部上面は、矩形状の平坦面を呈している。

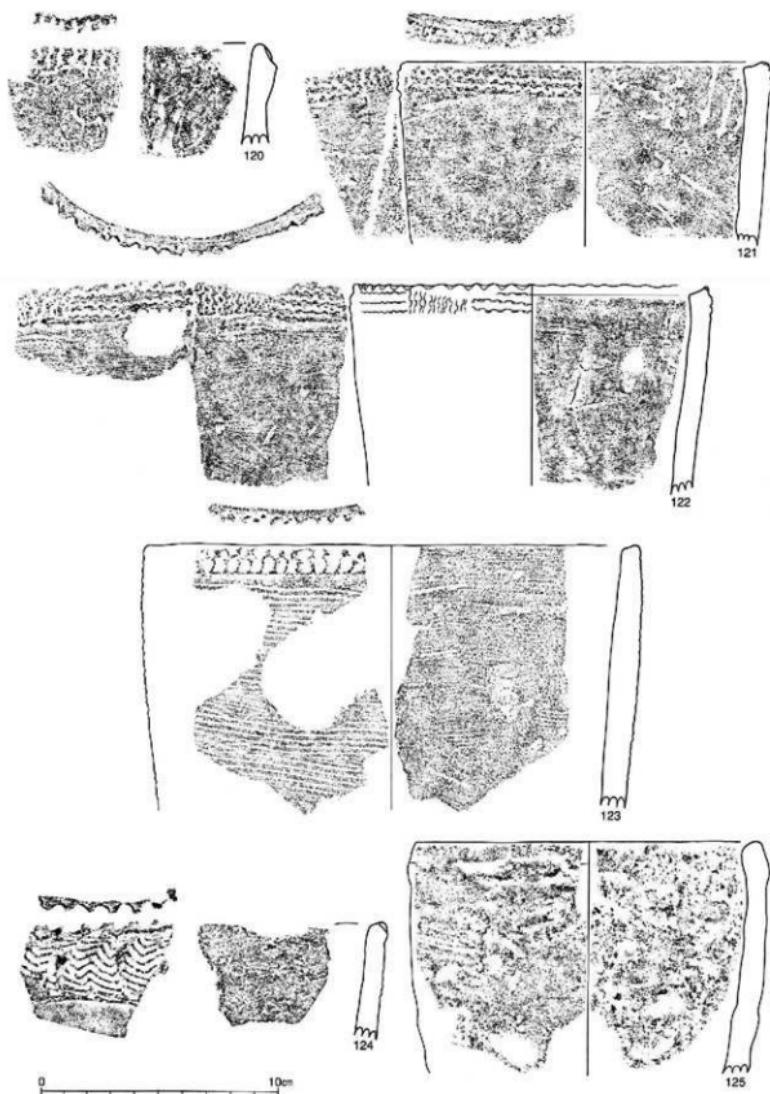
129~164は胴部である。内面の調整については、貝殻条痕後ナデを施してあるのが、131・134・141・145・146・149~151・153・154・157・164である。152は、ケズリと貝殻条痕を施した後、ナデ調整をしている。その他の129・130・132・133・135~140・142~144・147・148・155・156・159~163は、ケズリ後ナデである。155・156については、ハケ目状の丁寧なケズリが見られる。

胎土については、礫が極めて多く含まれるのが、130・131・133・162、次いで多く含まれるのが、153・163である。

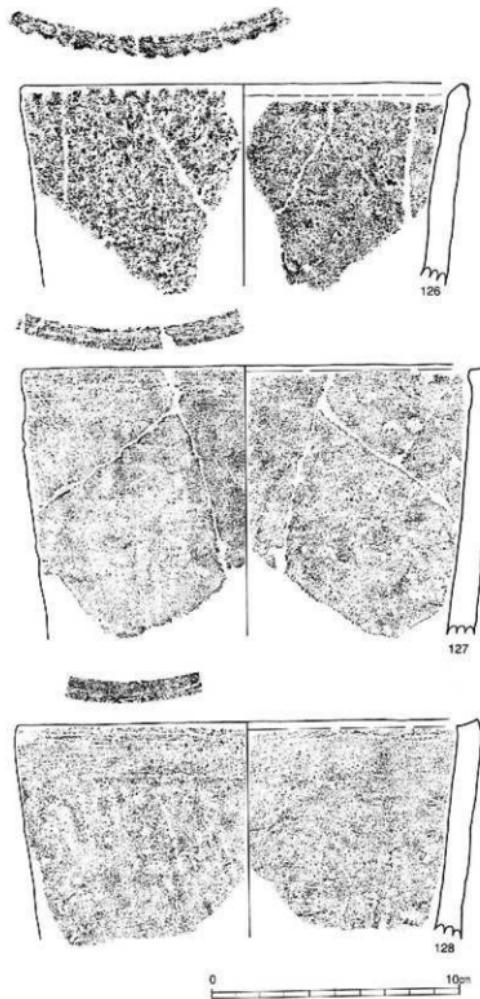
いずれの資料も、胎土に含まれる礫等は極めて少ないが、162のみ1cm程度の小礫など砂粒や礫が多数含まれる。

165~186は底部である。胴部外面下位部分の施文については、165~172は無文であり、173~178は、底部付近に2~3条程の横位の貝殻条痕が施されている。179~186は、胴部下端付近に縱位の貝殻条痕がめぐらされている。173は、胴部上半部には斜位の貝殻条痕が施され、胴部下半部には横位の条痕が明瞭に残されている。

底部外面の調整については、条痕が施されているのが173・174であり、ミガキが確認できるのが167・170・171・177・178・180~182・185・186である。



第26図 I類土器13



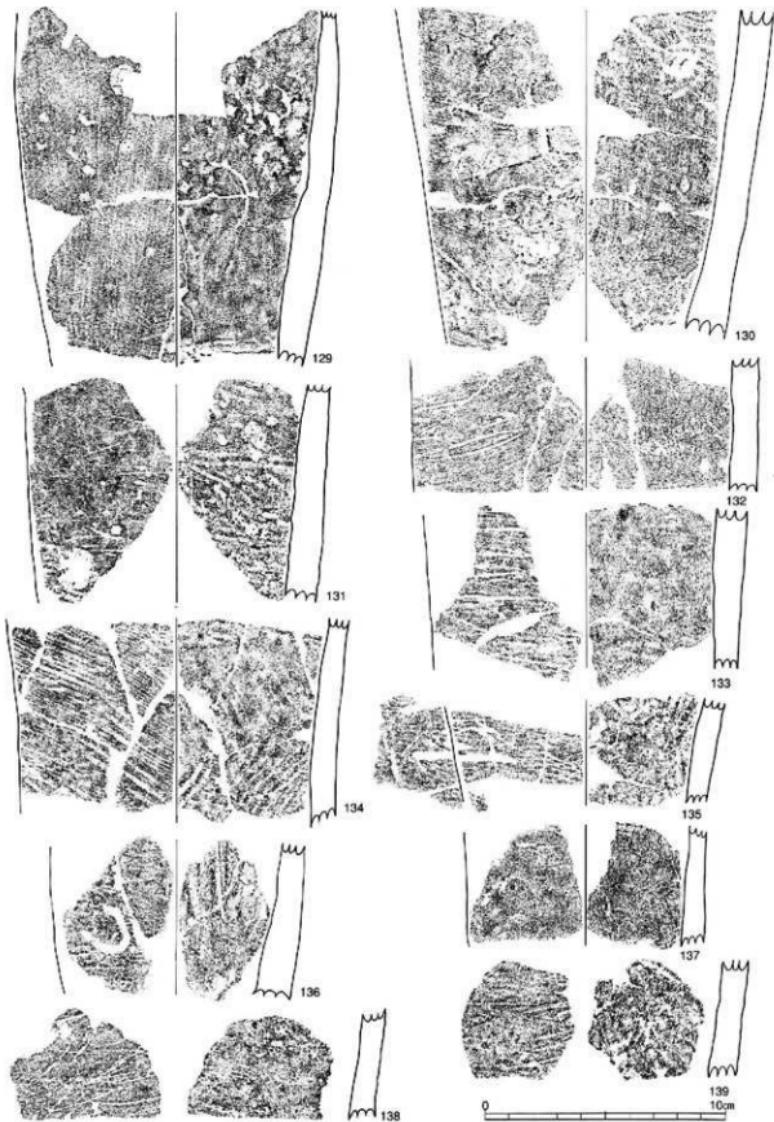
第27図 I類土器14

172と177には1~2条の沈線が確認できるが、貝殻条痕によるものか定かでない。171は、底部と胴部の輪積みによる接合の不完全部分が観察できる。また、胴部下端部が、つまみにより若干外側に張り出している。他に170は、底部から1cm程度上部の胴部外面を横方向にナデ調整した結果、その下部分が外側に張り出している。他の資料には底部の張り出しは見られない。

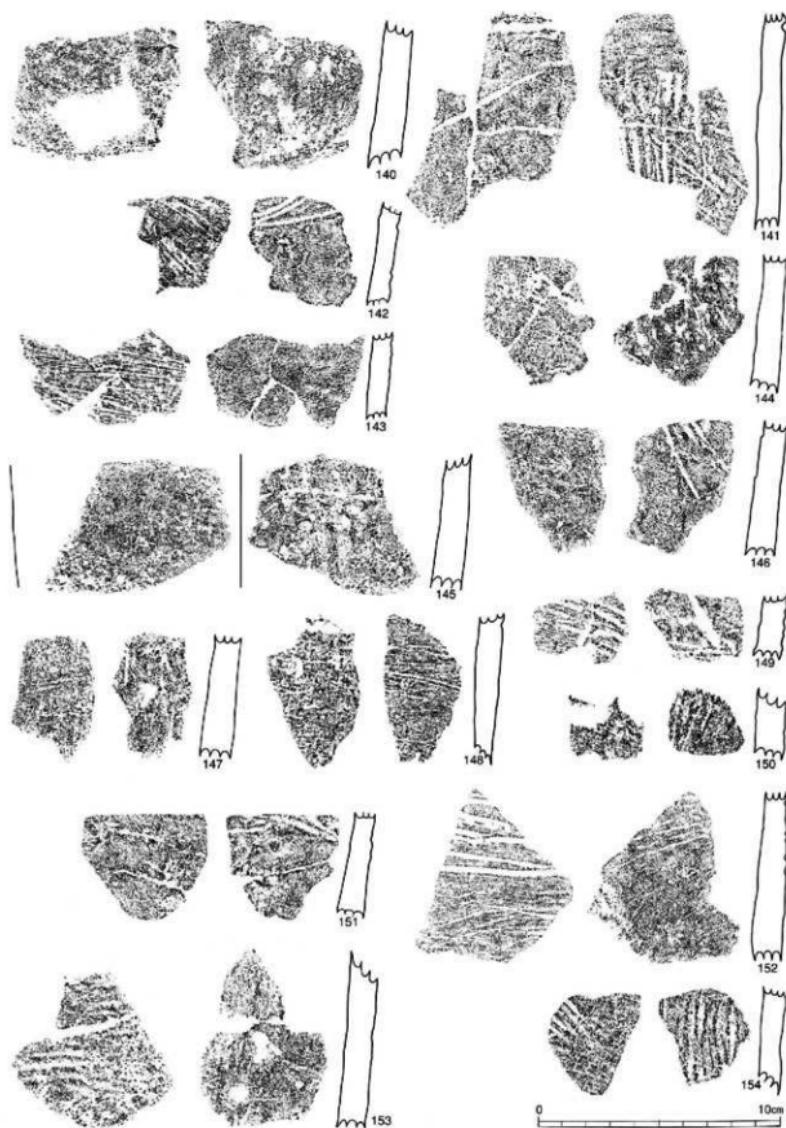
胴部内面の調整については、貝殻条痕を施してあるのが、165・167~169・173~175・178~179・182~185である。167・169は、ハケ目状の丁寧なケズリが見られる。168は胴部の底部に接する面において1cm~2mm程度の幅の貝殻条痕が横方向にえぐるように施され、173・181は同部分において1cm程度の幅の縱方向の貝殻条痕がえぐよう施されている。166・170~172・180・181・186は、ケズリ後ナデ調整である。

底部の内面調整については、同心円状の貝殻条痕が確認できるのは、165・167・169・173・175・177~179・181・182・185である。

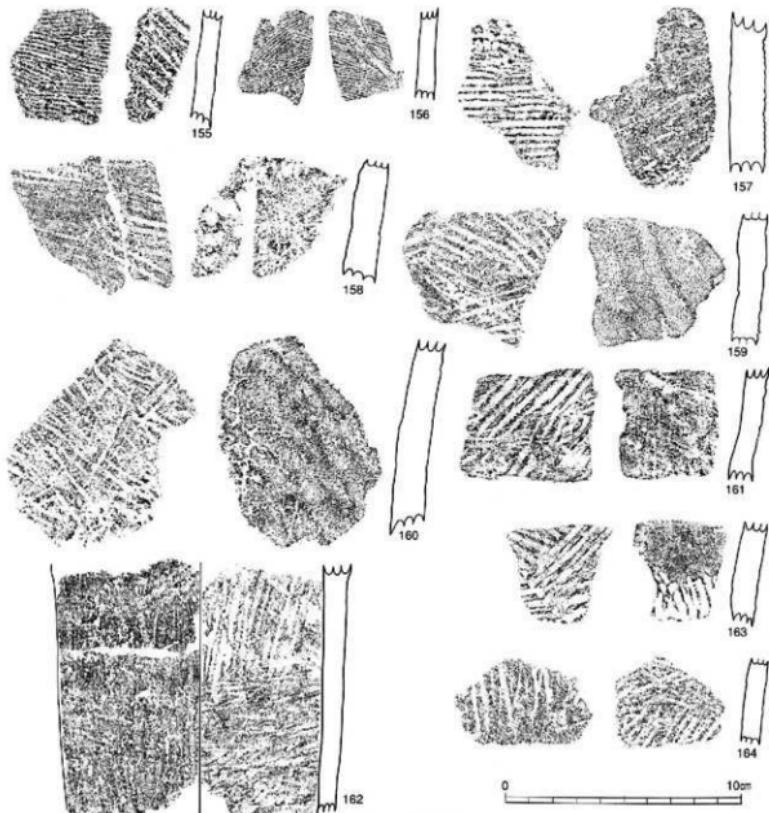
砂粒や小砾が多く含まれるのは、168・170・173・174・179~182・184である。



第28図 I類土器15



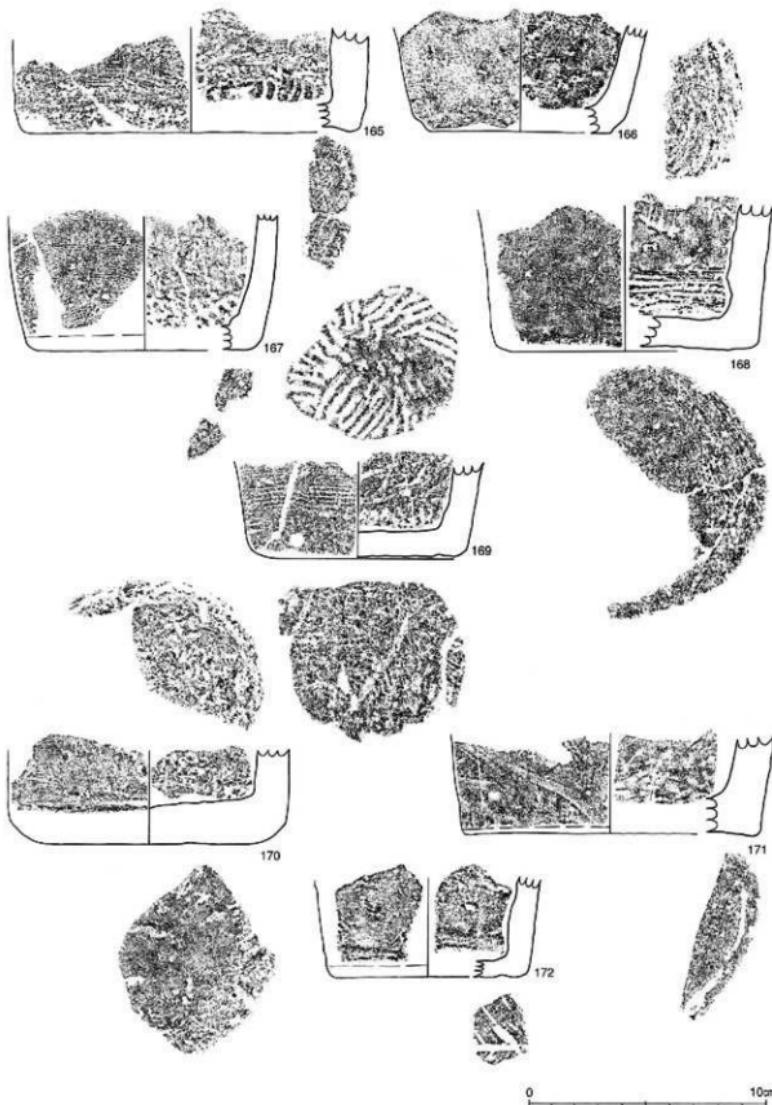
第29図 I 類土器16



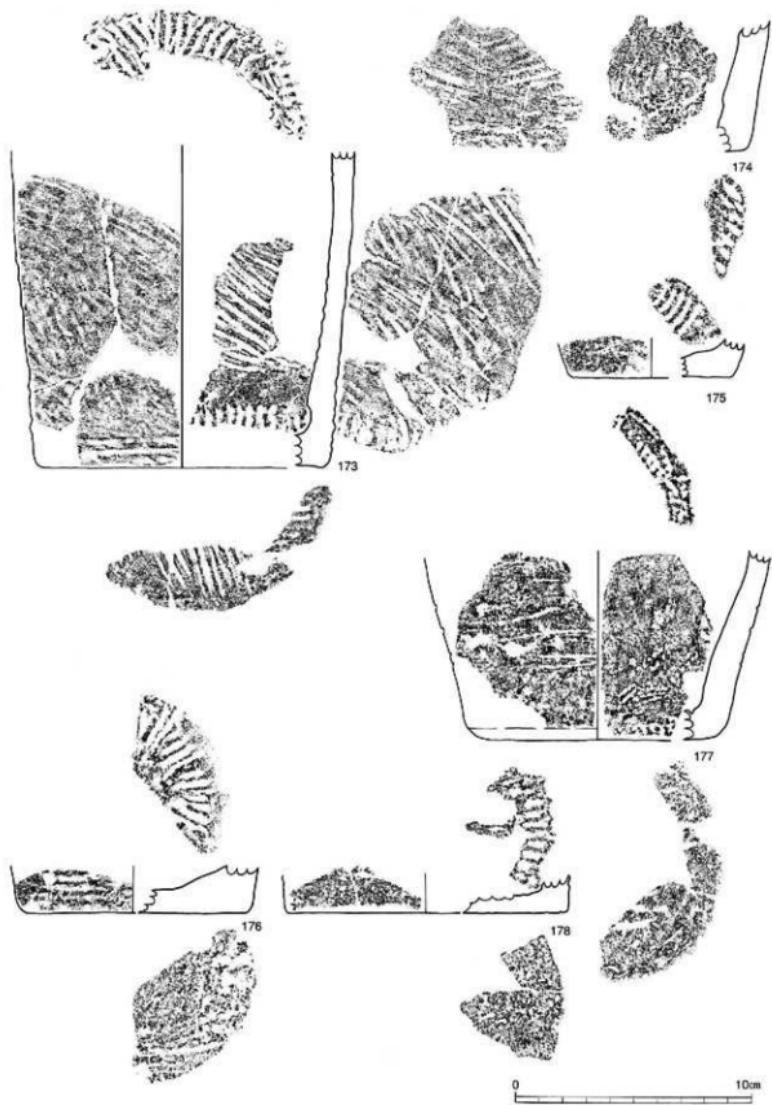
第30図 I類土器17

第2表 I類土器観察表 1

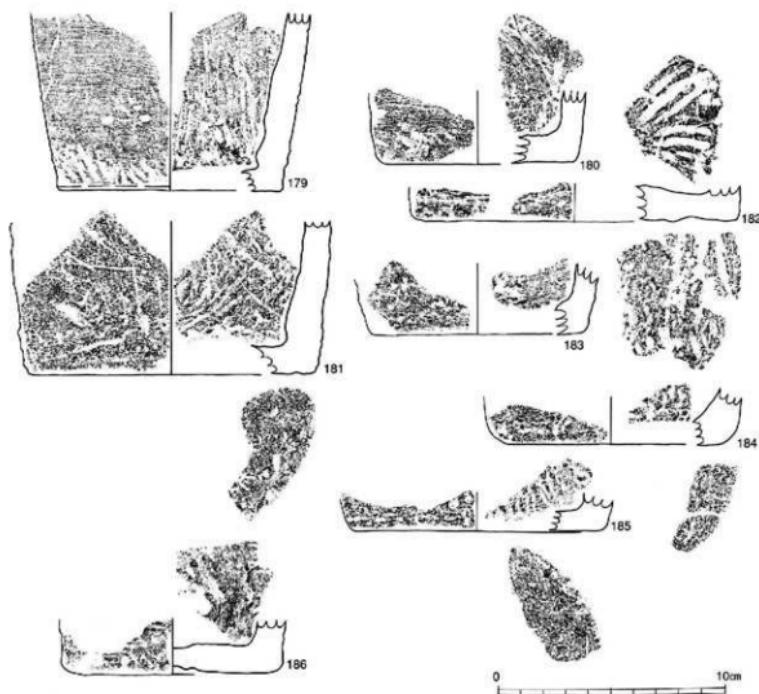
補圖 番号	遺物 番号	出土区 層位	色調		胎土			焼成	外面		内面	備考
			外	内	石英	長石	隕石		良	貝殻刺突文		
第15 図	13	K-5	V	橙色	黄色	○	○		良	貝殻刺突文	条痕後ナデ	完形
	14	J-5	V	明赤褐色	橙色	○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	15			黄褐色	黄褐色	○	○		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	16	K-5	IV	黒褐色	暗灰黄色	○	○		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	17	J-3	V	灰黃褐色	灰黃褐色				良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	18	K-4	V	黄褐色	黄褐色	○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	ハケメ状
	19	K-4	V	黄褐色	黄褐色	○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	ハケメ状
	20	K-4	V	黄褐色	黄褐色	○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	21	K-3	V	暗灰黄色	暗灰黄色	○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	22	K-4	V	暗灰黄色	暗灰黄色	○	○		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	
第15 図	23	K-3	V	橙色	橙色	○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	24	K-5	V	橙色	橙色	○	○		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	25	L-5	V	橙色	褐黄色	○			良	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	



第31図 I類土器18



第32図 I類土器19



第33図 I類土器20

第3表 I類土器観察表 2

捕団 番号	遺物 番号	出土区 層位	色調			胎 土	焼成	外 面	内 面	備考
			外 色	内 色	石英 長石					
第 16 団	26	J-3	V	楕 色	楕 色		良	貝殻押圧・貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	27	K-4	V	楕 色	灰 色 ホリーブ色		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	28	K-4	V	楕 色	楕 色	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ 完形	
第 17 団	29	カラン		楕 色	楕 色	○ ○	良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	30	K-4	IV	楕 色	黄 楕 色	○ ○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	31	カラン		黄 楕 色	黄 楕 色	○ ○	良	貝殻刺突文	ナデ	
	32	K-3	V	黄 楕 色	黄 楕 色		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	33	K-5	V	楕 色	楕 色	○ ○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	34			黄 色	黄 色		良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	35	K-4	V	灰 黄 褐色	灰 黄 褐色	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	36	K-4	IV	黄 楕 色	黄 楕 色	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	丹
	37	K-4	V	黄 楕 色	黄 楕 色	○	良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ	
	38	K-4	■	黄 楕 色	黄 楕 色	○ ○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	39	K-4	■	楕 色	楕 色	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	40	J-5	V	暗灰 黄色	暗灰 黄色	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	41	カラン		暗灰 褐色	暗灰 褐色	○	良	貝殻刺突文	ケズリ	
	42	J-5	V	ホリーブ 色	黄 色	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	





### II 類土器 (第34・35回)

器形については、円筒形は195・199・200、角筒形は192・196・197・202が確認でき、他の土器片については、小片のため器形を確定できない。口縁部の断面観が、187は舌状に丸みを帯び、188と189は平坦面を有する。188は口唇部外端に範状工具によると思われる縱位の刻みが施されている。184は口唇部の形状から波状口縁を呈すると想定される。188と194は、半口縁と思われるが、彼見できる口唇部の土器片が少なく確定できない。

口縁部から胸部に至る文様や調整については、187は左下がりと右下がりの貝殻条痕を菱形状に交差させた後、口縁部に横位の貝殻条痕による刺突文を非連續的に4条程度施している。188は、全面的に縱位の貝殻条痕を施文後、口縁部に横位の貝殻条痕による刺突文を2条めぐらしている。胸部には斜位の数条の細沈線が確認できるが、造作意図に基づくものかどうかは不明である。189は、縱位の貝殻条痕のみ確認できる。190・191は斜位の貝殻条痕を施文後に貝殻刺突文を縦列

に連点状に施文してあり、施文形態より同一個体の可能性がある。192は斜位の貝殻条痕施文後に1cm幅程度の斜位の貝殻刺突文を縦列に施文させている。193は、斜位の貝殻条痕施文後に、縱位の貝殻刺突文を2条縦走させている。194は縦位の貝殻条痕を施文後に、口縁部に4~5条程の横位の貝殻刺突文をめぐらしている。胸部に一部貝殻刺突文を縱走させている痕跡が同える。195は縦位の貝殻条痕施文後に、縱位もしくは斜位の貝殻取線による連続刺突文を數条施してある。197・198は同一個体と考えられ、斜位の貝殻条痕施文後に縦位に貝殻取線による連続刺突文を施している。195・196より刺突文の施文間隔が密である。199~201は底部の資料である。199は胸部外面においては、斜位の貝殻条痕施文後に縦位の連続刺突文を施し、底部付近においては微細丁寧な条痕文を2.5cm幅程度に縦列に施文している。底部内外面ともに丁寧に磨きがかけられている。200~202は底部付近に丁寧な貝殻条痕が施されている。200の底部外面は、丁寧に磨きがかけられている。

第6表 I 類土器観察表 5

捕回 番号	遺物 番号	出土区 番号	層位	色 膜				胎 土	焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石					
第 33 回	183	K-4	III	褐 色	褐 色	○		良	ナデ		貝殻条痕文	
	184	K-4	V	褐 色	褐 色			良	ナデ		貝殻条痕文	
	185	-	-	褐 色	黄 褐色	○	○	良	ナデ		貝殻条痕文	
	186	K-4	V	褐 色	褐 色	○	○	良	ナデ		ナデ	

第7表 II 類土器観察表

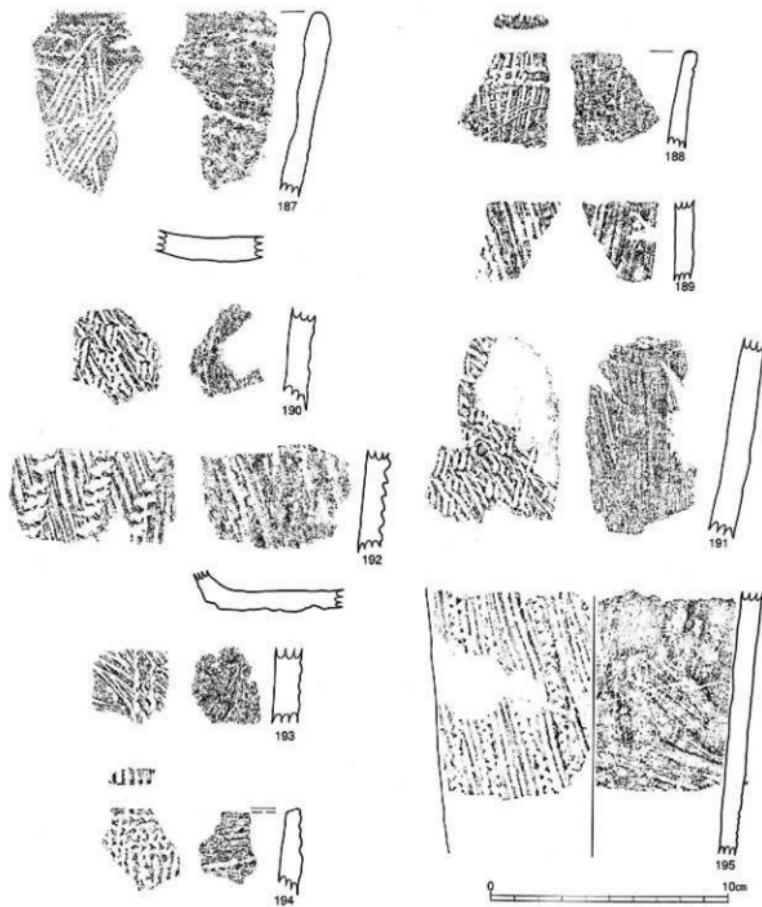
捕回 番号	遺物 番号	出土区 番号	層位	色 膜				胎 土	焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石					
第 34 回	187	C-5	IV	灰 褐色	灰 褐色	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	188	-	V	棕 色	暗 灰 褐色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	189	L-4	V	暗 灰 褐色	浅 黃 色	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	190	J-3	V	棕 色	褐 灰色	○	○	良	貝殻条痕文後縦位刺突	ケズリ後ナデ		
	191	J-4	V	棕 色	褐 色	○		良	貝殻条痕文後縦位刺突	ケズリ後ナデ		
	192	J-4	V	棕 色	棕 色	○	○	ガラス	良	貝殻条痕文後貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	193	J-4	V	赤 褐色	黑 褐色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	194	J-4	V	褐 色	褐 色	○	○	良	貝殻刺突文	貝殻条痕文ナデ		
	195	J-4	V	黄 褐色	褐 色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
第 35 回	196	J-4	V	浅 黃 色	暗 灰 褐色			良	貝殻条痕文・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	197	J-4	V	赤 褐色	赤 褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	198	J-4	V	赤 褐色	赤 褐色	○	○	良	縦位刺突	ケズリ後ナデ		
	199	D-8	IV	赤 褐色	暗 灰 褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	200	J-4	IV	棕 色	棕 色	○	○	良	沈線文	ナデ		
	201	J-4	V	黄 褐色	黄 褐色	○	○	良	沈線文	ケズリ後ナデ		
	202	J-4	V	棕 色	棕 色	○	○	良	沈線文	ナデ		

### III 類土器 (第36~42回)

このIII類の土器は、口縁部の器形により2群に分類し詳述することとする。

### III-a 類土器 (第36~38回)

器形は胸部でわずかに膨らみを帯び、頸部は若干しより口縁部が大きくもしくは緩やかに外傾する一群である。



第34図 II類土器 1

口唇部にキザミ目を有するのがほとんどであるが、203・204・209の3点はキザミ目がない。キザミ目の施文部位は、口唇部上面、口唇部内面側縁端部、外面側縁端部の3か所に類別される。

口縁部の文様については、斜位の貝殻刺突をめぐらせるのが、203・207・209・212・216・218~224であ

り、くの字状の貝殻刺突文を施すのが208・210、横位の刺突文をめぐらせるのが211・213・215、羽状文を施すのが216・217である。

胴部の文様については、203・207・211・213・214・216が綾杉文で構成されており、205は縦位の貝殻条痕、206は斜位の貝殻条痕が確認できる。

内面の調整については、228は貝殻条痕後ナデを施してあるが、それ以外は、全てケズリ後ナデ調整をしてある。胎土の状態では、小穢が極めて多く含まれるのは見受けられない。

### III b 類土器 (第39・40図)

口縁部が直行ないし山形口縁を有する一群である。大半が平口縁であるが、可能性を含めて228～230・232・234～236は波状口縁を呈していると考えられる。大半の資料が器壁8 mm～1 cm程度で、a類と大きな違いは見られないが、229・230・232・235は薄い部位で5 mm程度で器壁が薄い。

口唇部に刻みを有する資料の割合は、a類に比して少ない。221・222は口唇部上面に1条の列点が横位で施され、胎土や文様の類似性から同一個体の可能性が高い。228は口唇部上面に縱位の刺突文が施される。232・235も器形や文様、胎土が酷似しているので同一個体と思われる。口唇部上面に貝殻復縁部による1条の列点文が横位で施されている。それ以外の資料については、口唇部上面にキザミ目は確認できない。

口縁部については、220～230は直行し、231～235は口縁部がやや内窪気味で瘤状突起を有し、236は口縁部がやや外反し瘤状突起を有している。

口縁部の文様については、縦位・斜位の貝殻刺突文を1条めぐらせるのが、220～225・227、縦位の刺突を2条めぐらせるのが226、横位の刺突文をめぐらせるのが220、くの字状に貝殻刺突文を施すのが228～230・232である。233・234・236は棒状工具により径5 mm程度の列点を2条横向方向にめぐらしている。他に、232・233・236は、貝殻刺突文を施文後に、下位部分に1条の横位の貝殻刺突文をめぐらしている。

胴部の文様については、223～225・227は横位の貝殻条痕、226・228は横位と斜位の条痕、229・230・236は縦位もしくは斜位の貝殻条痕が施されている。232・233は斜位の条痕調整後に左下がりと右下がりの斜位の貝殻刺突文が施されている。

内面の調整に関しては、228のみが貝殻条痕後ナデを施し、それ以外は、全てケズリ後ナデ調整をしている。

胎土については、小穢が多く含まれるのは見受けられない。

237～252は胴部である。252は資料中位部分に外側への屈曲が見られ、外反する頸部付近の資料と推察される。指の押圧の痕跡が確認できることから、土器製作過程の一端がうかがえる資料である。

外面調整については、238・249・252の3つの縦位の貝殻条痕であり、その他の殆どが二枚貝腹縫による縫杉文である。

内面調整については、250のみが貝殻条痕調整であり、大半はケズリ後ナデの調整である。砂粒や小穢が多く含まれるのは239・252であり、その他については、確はあまり含まれない。

253～259は底部である。器形について、254及び256はつまみ出しにより、胴部下端部が外に張り出している。255は底部からの下面観が部分的に多角形の様相を呈しているが、縦位の貝殻条痕と横位の貝殻条痕の調整圧が、器形の形状に変化をもたらしたものと考えられる。

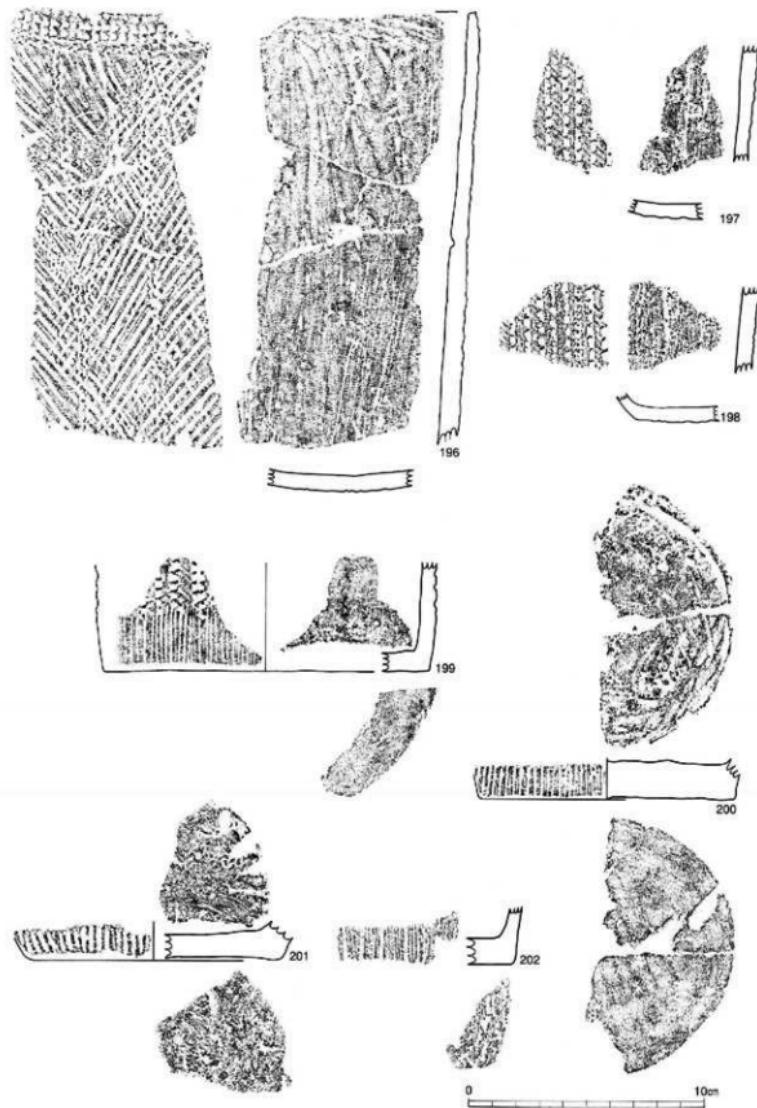
胴部外面調整については、254は斜位及び横位による貝殻条痕を施し、底部付近で縦位の押引状の刻みを施してある。255は、縦位の貝殻条痕と一部胴部下端にて横位による貝殻条痕を施した後、丁寧なナデ調整を施してある。256～258は、斜位や横位の貝殻条痕、259は縦位の貝殻条痕が確認できる。底部外面では、いずれも丁寧にミガキをかけてある。

胴部の内面調整については、258のみが貝殻条痕であり、それ以外はいずれもケズリ後ナデの調査をしている。底部内面においても、条痕による調査は確認できず、全て指ナデと推定される。

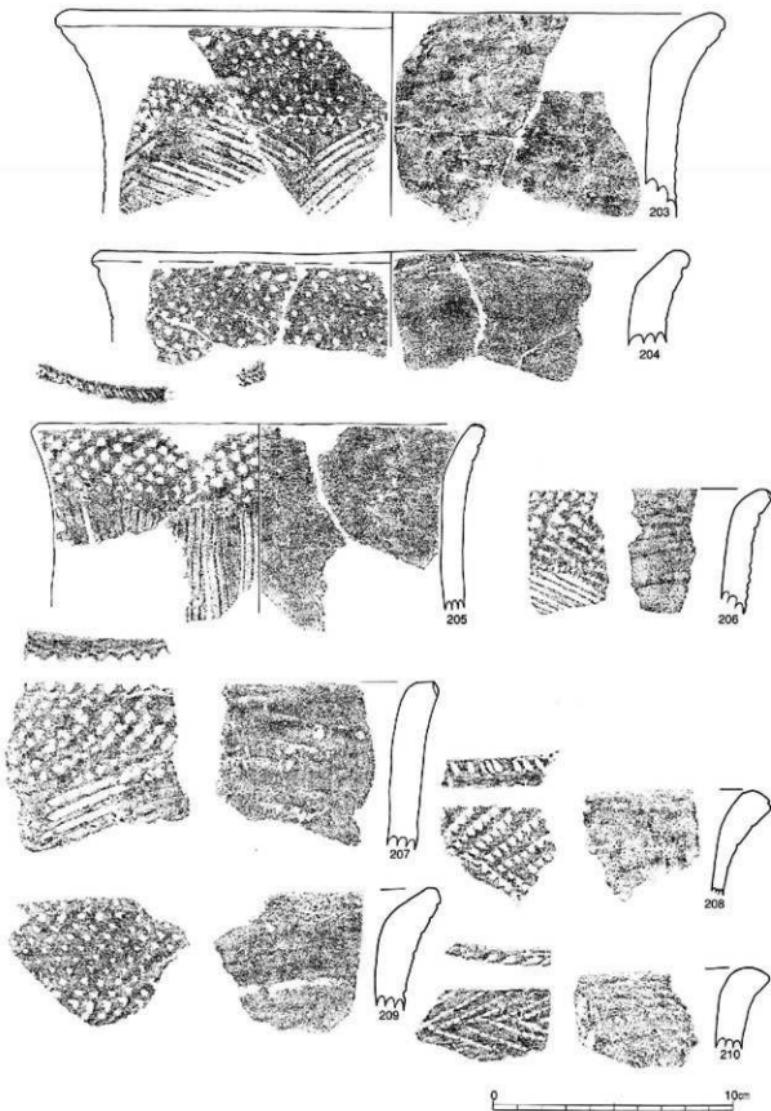
胎土については、小穢が多く含まれるのは257・258の2点のみである。

第8表 III類土器観察表1

押岡 番号	遺物 番号	出土区 域	層位	色調		胎土		焼成	外 面	内 面	備考
				外 部	内 部	右英 長石	觸感				
第 36 図	203	C-5	IV	黄 褐色	黄 褐色	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ	
	204	B-6	V	棕 褐色	褐 色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	205	K-4	V	黄 褐色	黄 褐色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	206	C-5	IV	黑 褐色	赤 褐色	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	
	207	B-5	IV	褐 色	褐 色	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	208	C-7	V	褐 色	褐 色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	209			灰 褐色	灰 褐色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	210	B-7	V	黑 褐色	赤 褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	

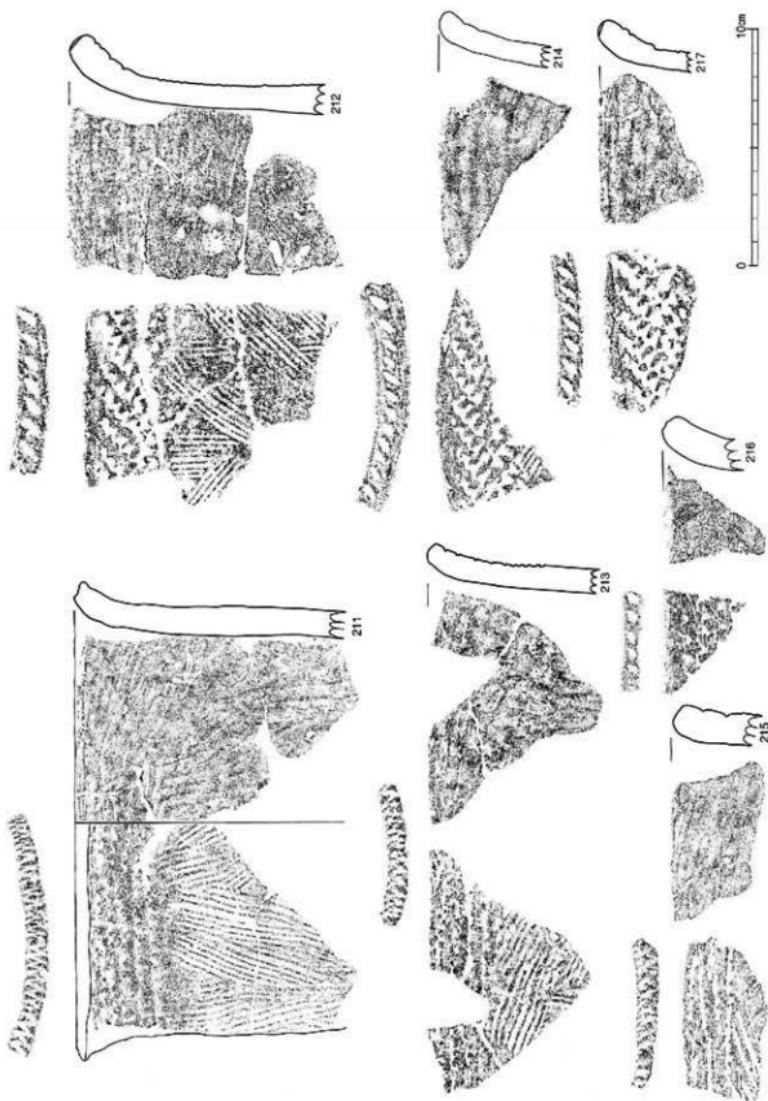


第35図 II 類土器 2



第36図 Ⅲ類土器 1

第37図 Ⅲ類土器 2

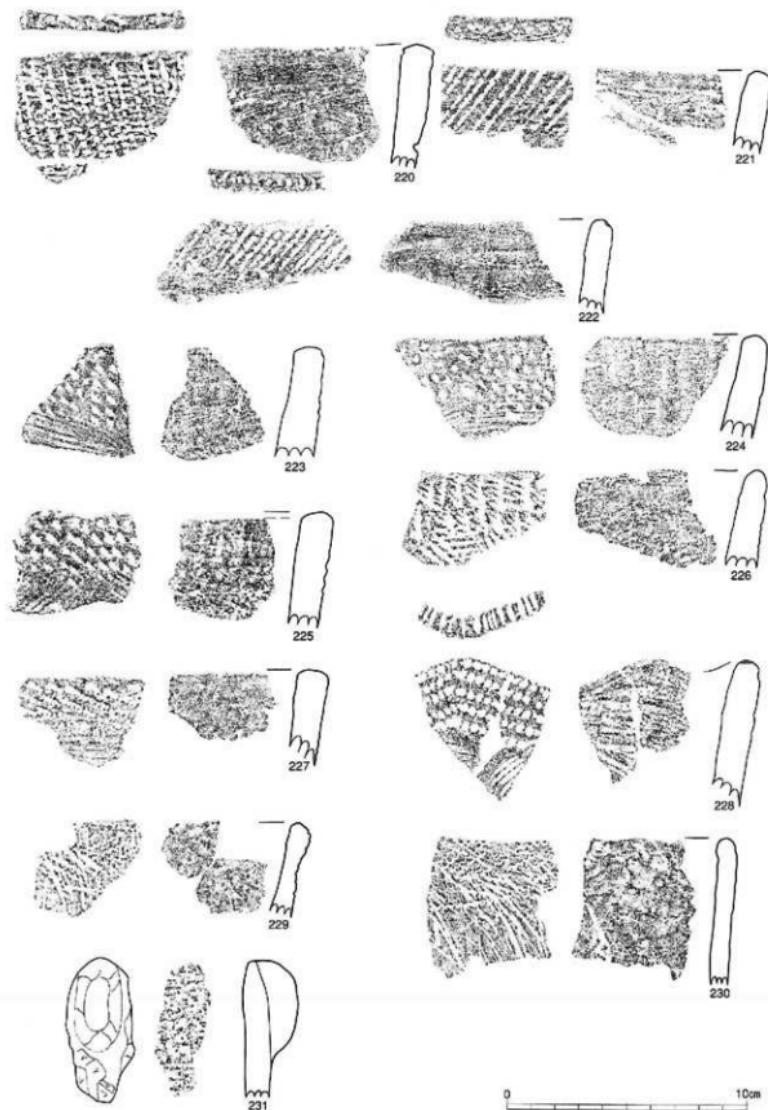




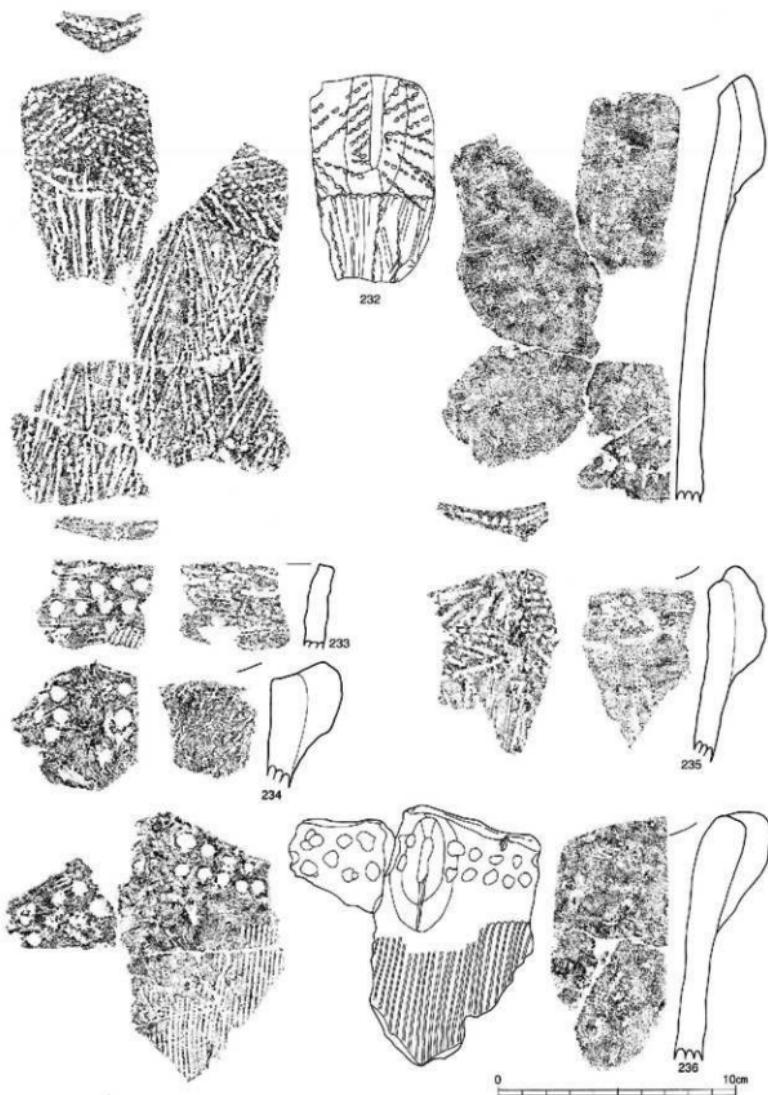
第38図 III類土器 3

第9表 III類土器観察表 2

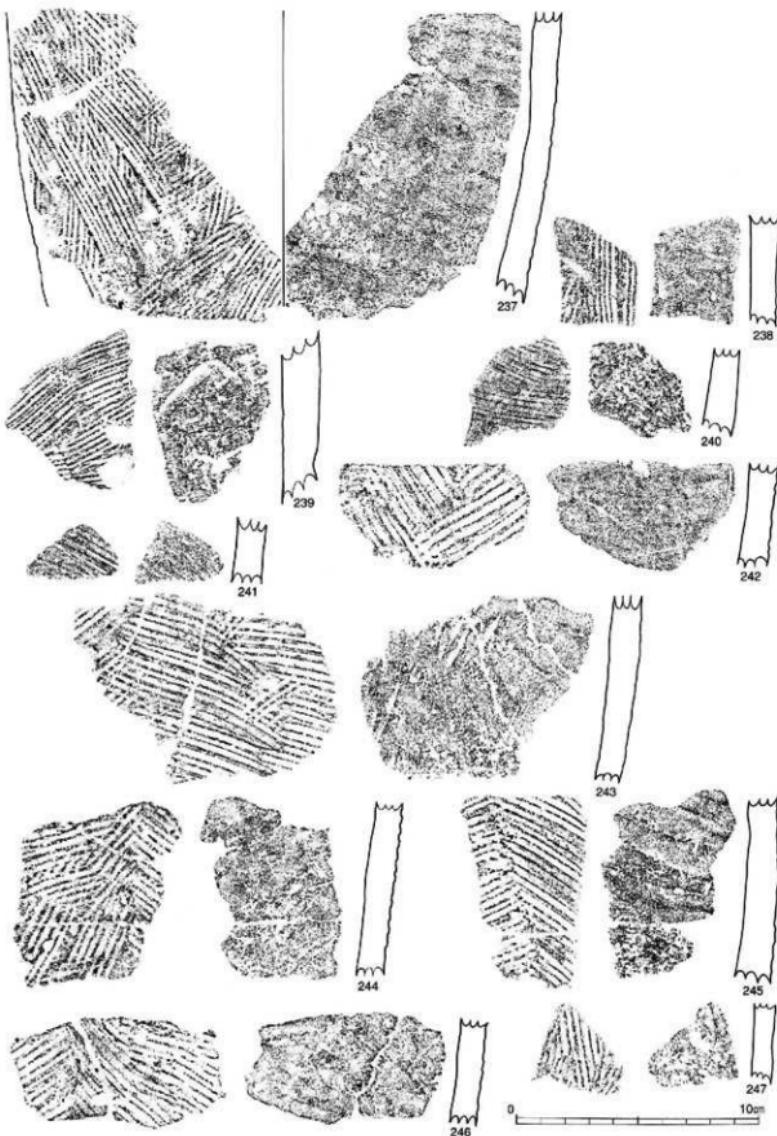
探査番号	遺物番号	出土区	層位	色調			胎土	焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英					
第37 図	211	C-6	IV	赤褐色	赤褐色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	212	D-7	IV	明黄褐色	黄褐色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	213	V	黄褐色	褐 色	○	○	良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ		
	214	D-8	IV	黄褐色	黄褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	215	C-6	IV	赤褐色	赤褐色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	216	B-5	IV	褐色	褐 色	○	○	良	貝殻刺突文後ナデ	ナデ	
	217	D-8	IV	暗灰褐色	黄褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第38 図	218	C-5	IV	褐色	褐 色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	219	C-5	IV	褐色	褐 色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	220	C-5	IV	赤褐色	黄褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第39 図	221	B-6	IV	黄褐色	黄褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	222	C-5	IV	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	223	B-5	V	褐色	褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	224	B-5	IV	褐色	褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ	
	225	C-5	IV	褐色	明赤褐色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ	
	226	B-5	IV	橙 色	暗赤褐色	○	○	良	押引文	ケズリ後ナデ	
	227	B-6	IV	橙 色	橙 色	○	○	良	押引文	ケズリ	
	228	C-5	IV	黄褐色	黄褐色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文後ナデ	
	229	C-5	IV	橙 色	橙 色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文		
	230	C-5	IV	橙 色	橙 色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	231			橙 色	橙 色	○		良		コブつき	



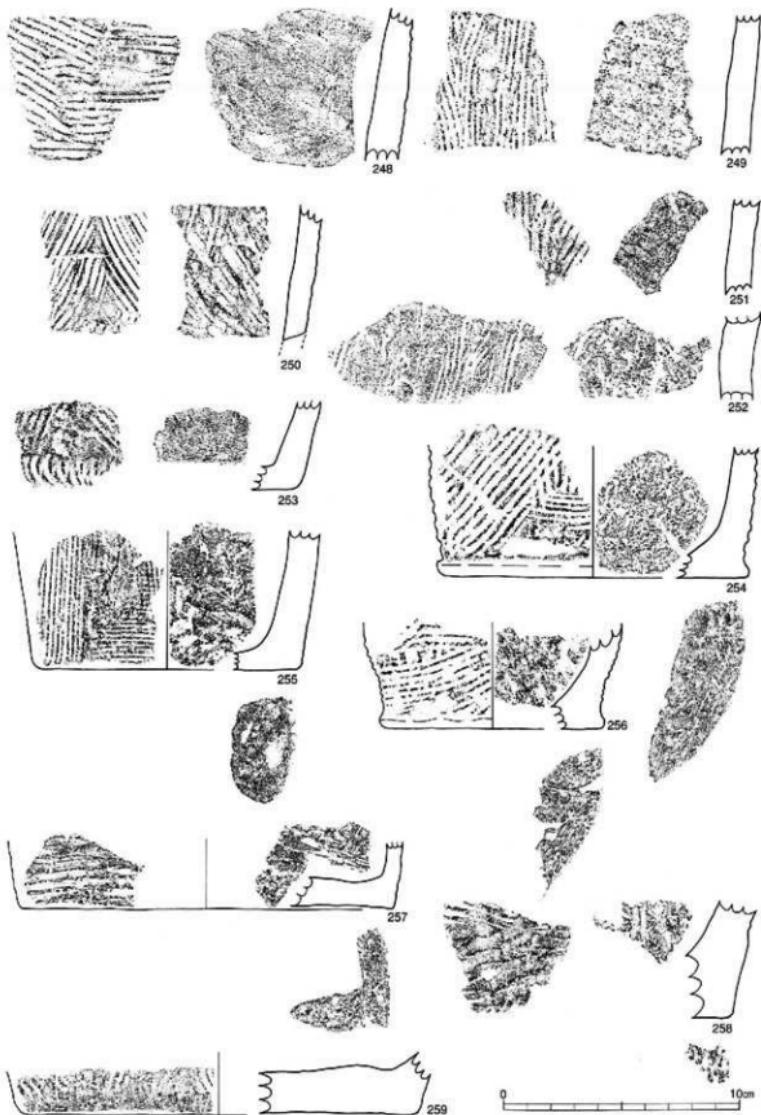
第39図 III類土器 4



第40図 III類土器 5



第41図 Ⅲ類土器 6



第42図 III類土器 7

### IV類土器 (第43・44図)

260~262は、施文具として貝殻腹縁部を使用し、左下がりと右下がりの刺突を数条ずつ交互に繰り返すことで、見かけ上、羽状文を呈する。胴部においては、貝殻刺突文により羽状文あるいは網目文を継続方向に施文している。

完形品は260の1点である。260は、底部から口縁部にかけて広がり気味に立ち上がるが、器形は左右対称でなく立ち上がる角度が左右で異なる。口縁部ではやや内傾する。口縁部には横位の6条の浅くかつ細い丁寧な貝殻刺突文が連続して施され、口縁部直下の左右に相対して長さ15cm、幅1cm、厚み5mm程度の横位の突起が添付する。口縁部直下から底部にいたるまで浅く細い丁寧な羽状文が施文されている。1対2穴の補修孔が4cm×5mm幅の間隔で施されている。261は口縁部が直行しないしわざかに内弯する。平坦面を有する口唇部上に貝殻腹縁部による横位の1条の刺突で施文している。

262は、胴部の資料であり、261より施文間隔が広めである。263~265は同一個体である。263・264は山形の口縁部である。わざかに内弯し、口唇部は内傾する平坦面を有する。IV類土器としては希少な角筒形であ

る。貝殻腹縁部を使用して、口縁部は横位もしくは若干斜位に刺突し、胴部においては全て同一方向に斜位に刺突している。同一方向に刺突することで、羽状文を呈しない。口縁部に3mmの横位の連続刺突を施し、胴部には斜位の刺突文を施してある。

外表面は丁寧にミガキやナデが施され、外表面の文様も刺突文の間隔が密で丁寧である。

### V類土器 (第45~48図)

この土器群は、文様形態から4つに分類して詳述することとする。

#### V-a類土器 (第45図)

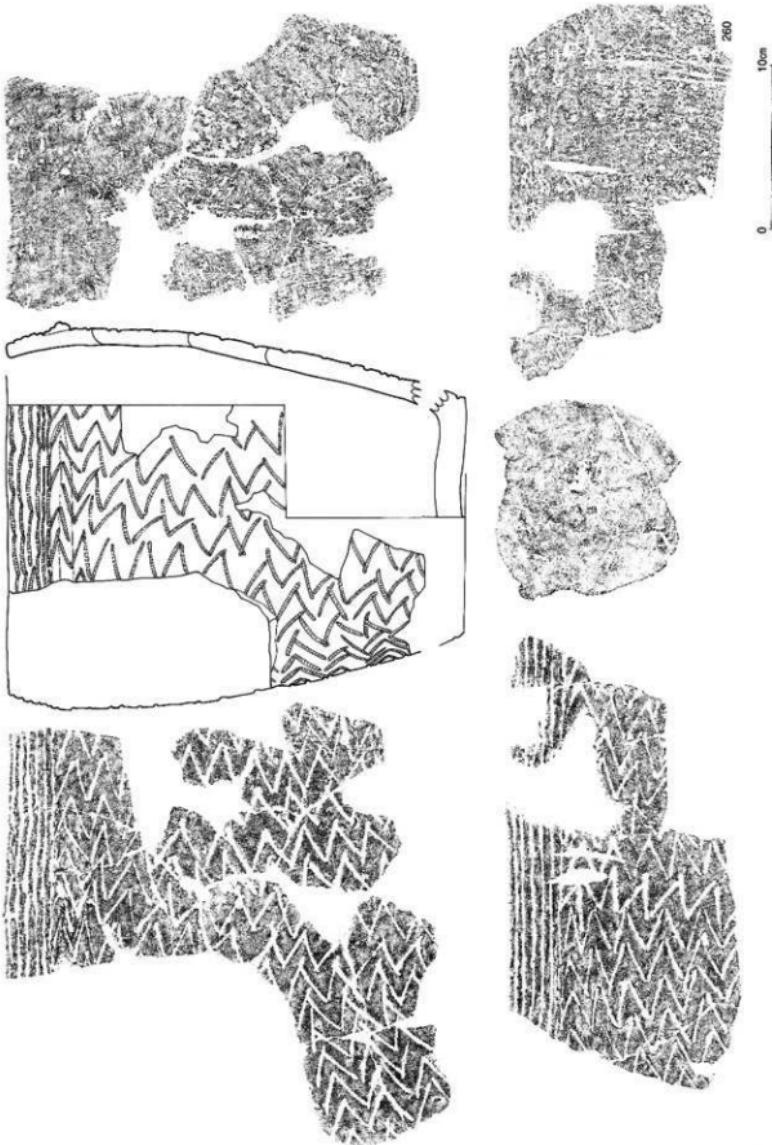
この類は、口縁部から胴部にかけて全面同一施文である。貝殻腹縁部により、直線的な条痕を密に施文することで羽状文を呈する一群である。口縁部から胴部にかけて全面的に同一に施文している。いずれも口縁部は直行しない内弯している。

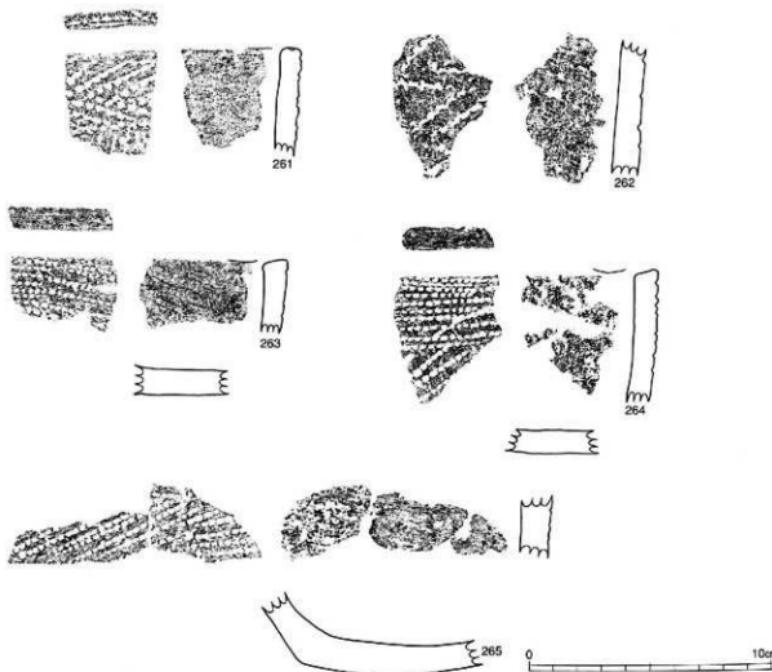
文様については、266~267は貝殻条痕による直線的な羽状文であり、268~270・273は横位及び斜位の条痕である。271には縹が極めて多く含まれ、266・268にも比較的多く含まれている。

第10表 III類土器観察表3

補助 番号	遺物 番号	出土区	層位	色調				焼成	外表面	内表面	備考
				外	内	石英	長石				
第40 図	232	C-5	IV	黄褐色	黄色	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	233	B-6	IV	赤褐色	朱色	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	234	B-6	IV	赤褐色	暗灰黄色	○	○	良	刺突文	ケズリ後ナデ	
	235	B-6	IV	黄褐色	灰白色	○	○	良	刺突文	ケズリ後ナデ	
	236	C-5	IV	赤褐色	暗灰黄色	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	237	C-7	IV	黄褐色	黄色	○		ガラス	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
第41 図	238	C-7	III	褐色	黄褐色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	239	B-6	V	褐色	灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	240	B-6	IV	褐色	赤褐色	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	241	C-6	IV	褐色	褐色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	242	C-5	IV	褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	243	C-5	IV	赤褐色	赤褐色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	244	B-6	IV	褐色	灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	245	B-6	IV	褐色	灰黄色	○		ガラス	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	246	C-5	IV	赤褐色	灰黄色	○		ガラス	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	247	B-7	IV	褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
第42 図	248	C-6	IV	浅黄褐色	浅黄褐色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	249	C-5	IV	黄褐色	黄褐色	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	250	B-6	IV	灰褐色	灰褐色	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文	
	251	C-7	V	浅黄褐色	浅黄褐色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	252	B-5	IV	褐色	褐色	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	253	B-7	IV	褐色	褐色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	254	D-7	IV	褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	255	C-6	IV	褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	256	D-8	IV	黄褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	257	K-5	IV	褐色	褐色	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	258	B-5	V	赤褐色	暗灰黄色	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文	
	259	B-5	IV	明黄褐色	明黄褐色	○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	

第43図 IV類土器 1





第44図 IV類土器2

#### V—b 類土器（第45・46図）

この類は、口縁部から胴部にかけて全面同一施文である。貝殻腹縁部により、縱位や斜位・横位によるうねりのある条痕や流水状の条痕を押し引く一群である。271・272・274・278がこの類に該当するが、V—a類と明確に分類できない資料も見受けられる。施文が雑で施文間の隙間が大きい。いずれも口縁部は直行ないし内弯し、小確が多く含まれている。

#### V—c 類土器（第45図）

この類は、口縁部に文様帶をもつてゐる一群であり、胴部以下は上記aないし b類に似た施文であり、275～277が本類に該当する。

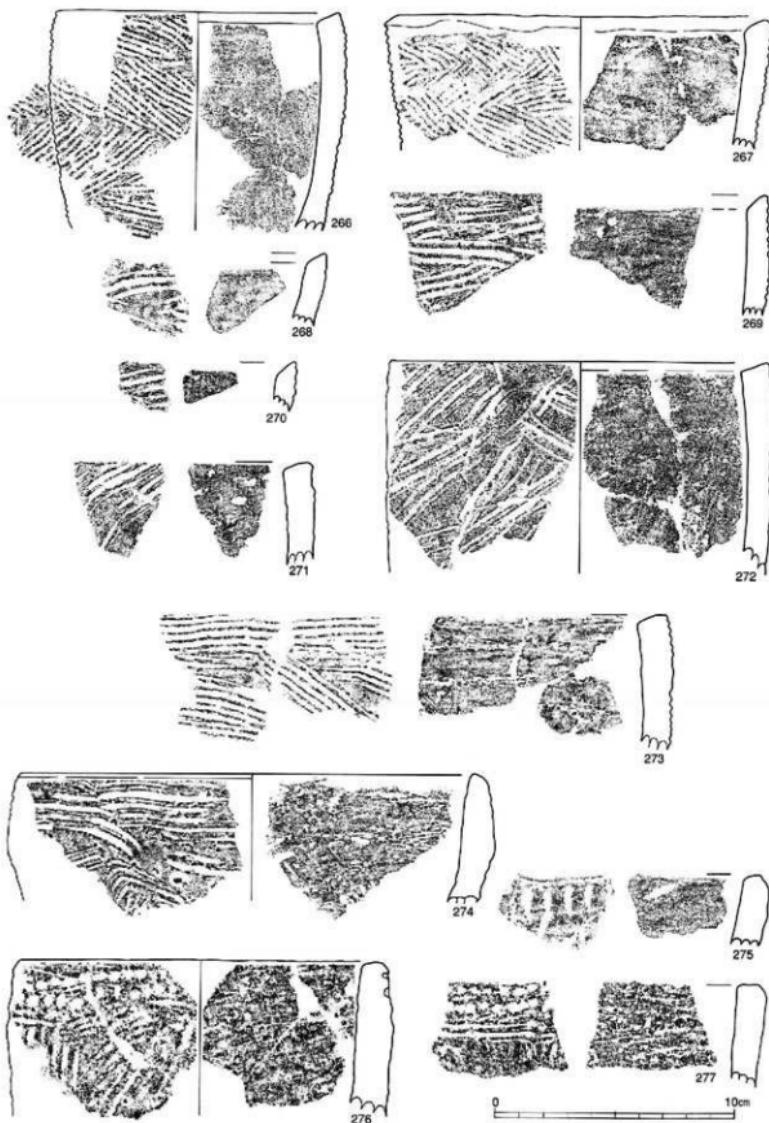
275は口縁部に貝殻腹縁部による1cm幅程度の鋸齒状縦位の刺突文を、横方向に連続してめぐらしている。

276と277は、口縁部に箇状工具による2条の列点文を横方向に連続してめぐらしている。276は磨耗が激しく胴部の文様を確認しにくい状況であるが、口縁部の文様帶や器形、口唇部の調整等の類似性から276と277は同一個体とも考えられる。276と277の文様を合して考えると、刺突列点文下に2～3条の横位の細めの条痕を施し、その下位部分から胴部にかけて横位や斜位の太目の貝殻条痕を施してあると想定される。

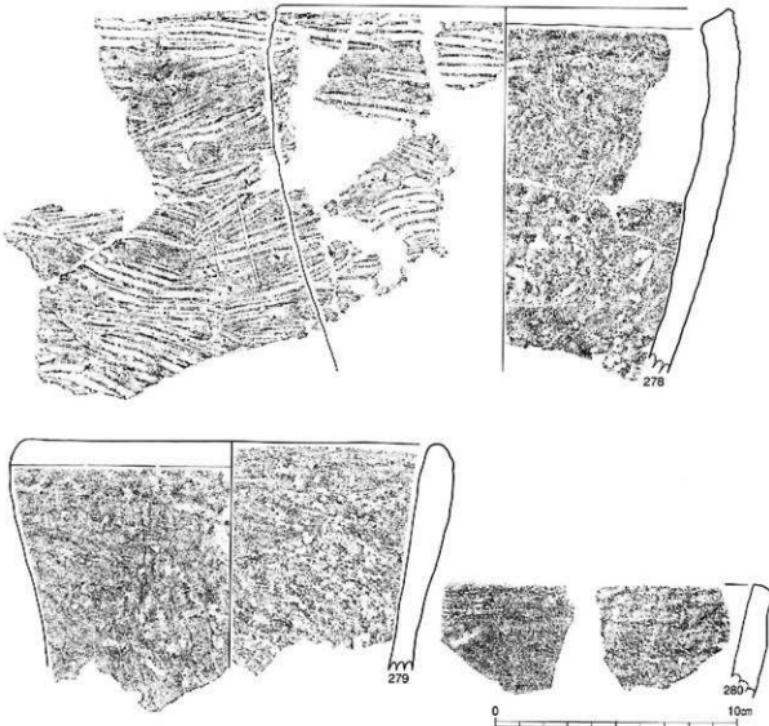
いずれの上器片も、小確等はあまり含まれない。

#### V—d 類土器（第46図）

この類は、文様を持たない一群で、279・280が本類に該当する。器形や胎土、調整等の酷似性から本類に分類されたものである。



第45図 V類土器 1



第46図 V類土器 2

279は口縁部断面が肥厚しているが、280は口唇部直下の指ナデ整形により口縁部上半部の断面が細くなっている。どちらもヘラケズリ後の指ナデの器面調整痕が頗著に残され、器面の凹凸が大きい。279には縫が多く含まれる。

281～295は胴部の資料である。大部分が小片であり、残存する部位で観察できる限りにおいてのみ記述する。

281～286はV—a類の胴部である。いずれも細目の条痕により施文され、直線的である。281・283～285は、一定方向に細い条痕が施される結果、条痕が交差せず羽状文を呈しない。282は、右上がりと右下がり

の条痕が資料左側部位で交差しており、羽状文を呈していると思われる。

287～295はV—b類である。いずれもa類土器よりも太目の条痕により施文され、a類に比して条痕が若干うねりを呈している。287は条痕が大変複雑で器面の凹凸も激しく、施文は綾杉文と考えられる。288は、直線的な横位や斜位の5条程の条痕が菱形を構成することにより進入角度が小さい綾杉状を形成する。289・291～294は、緩やかな斜位の条痕が接することにより进入角度が小さい綾杉状を形成する。295はうねりの大きい条痕を流水状に施文し、無施文部も大変広い。